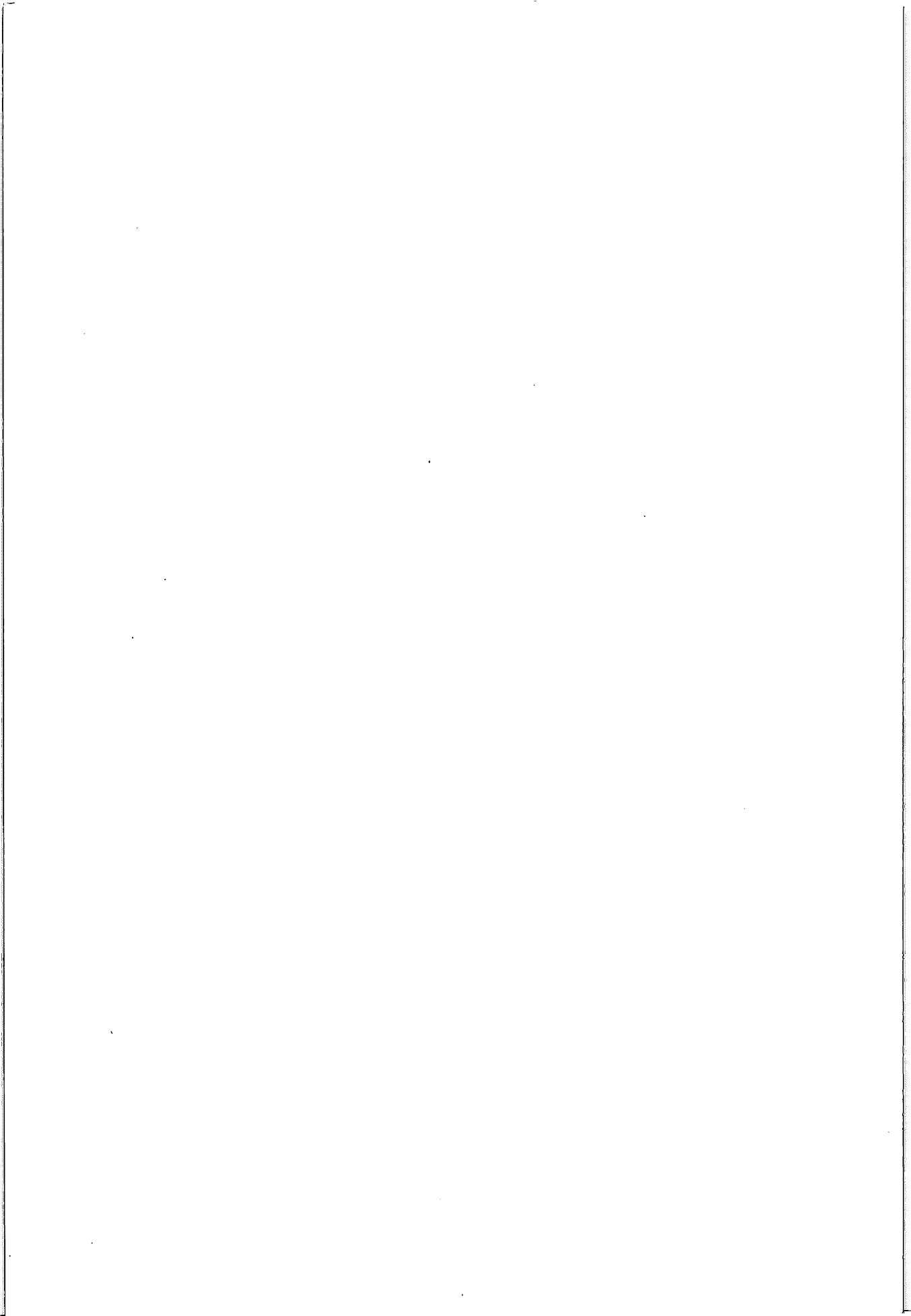


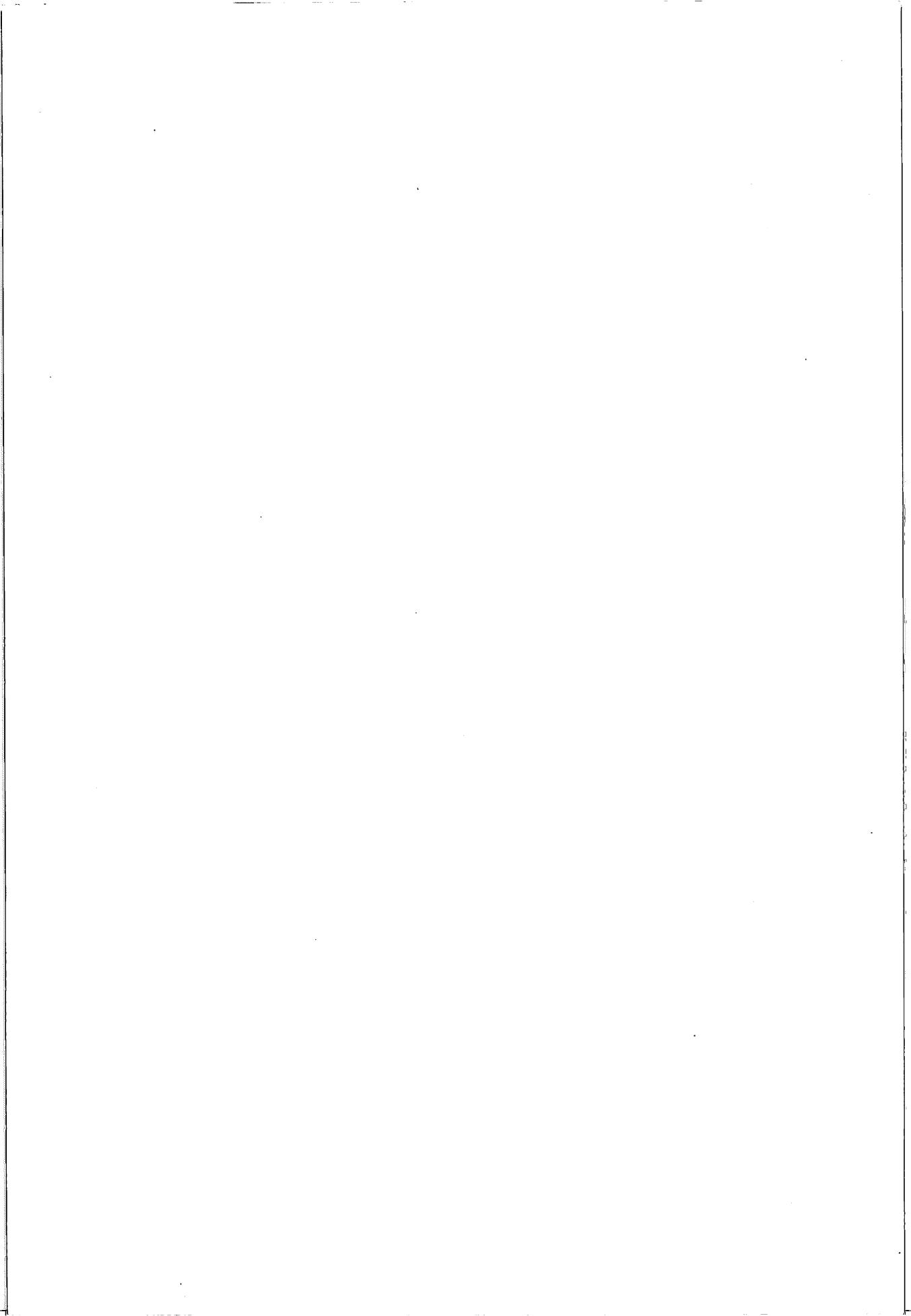
# 江 別 市 西 野 幌 11 遺 跡

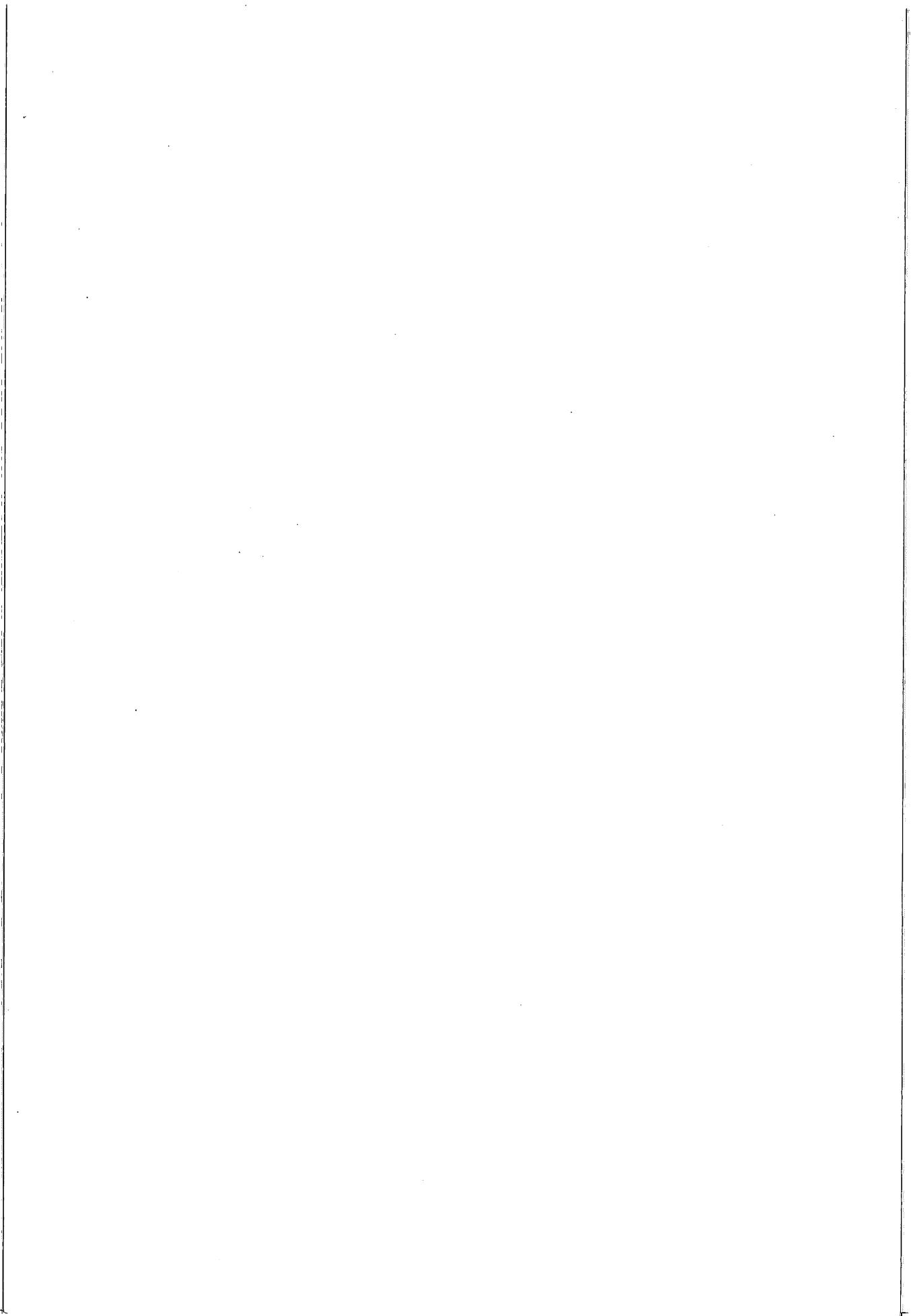
—道々野幌総合運動公園線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭 和 60 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター







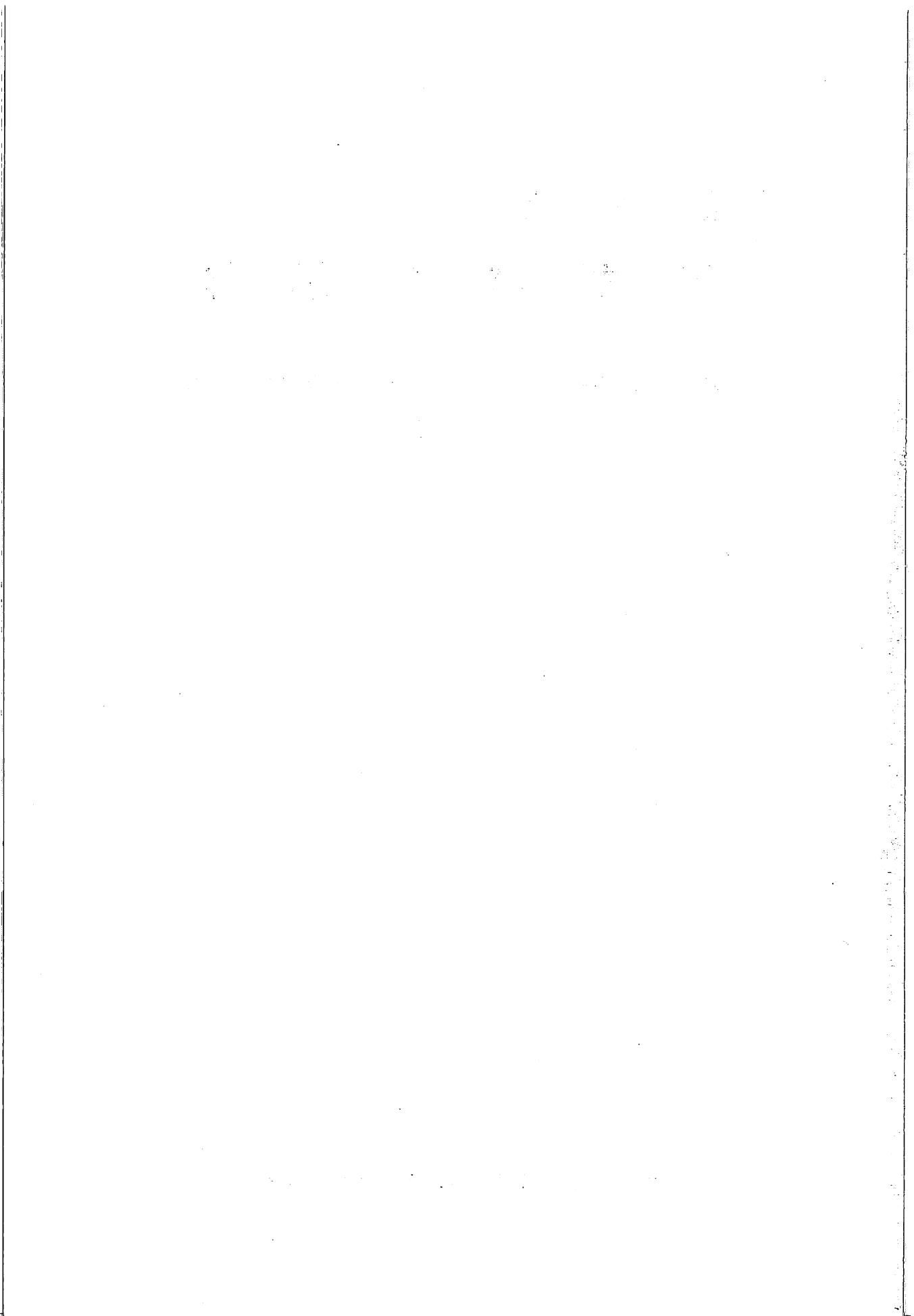
# 江 別 市

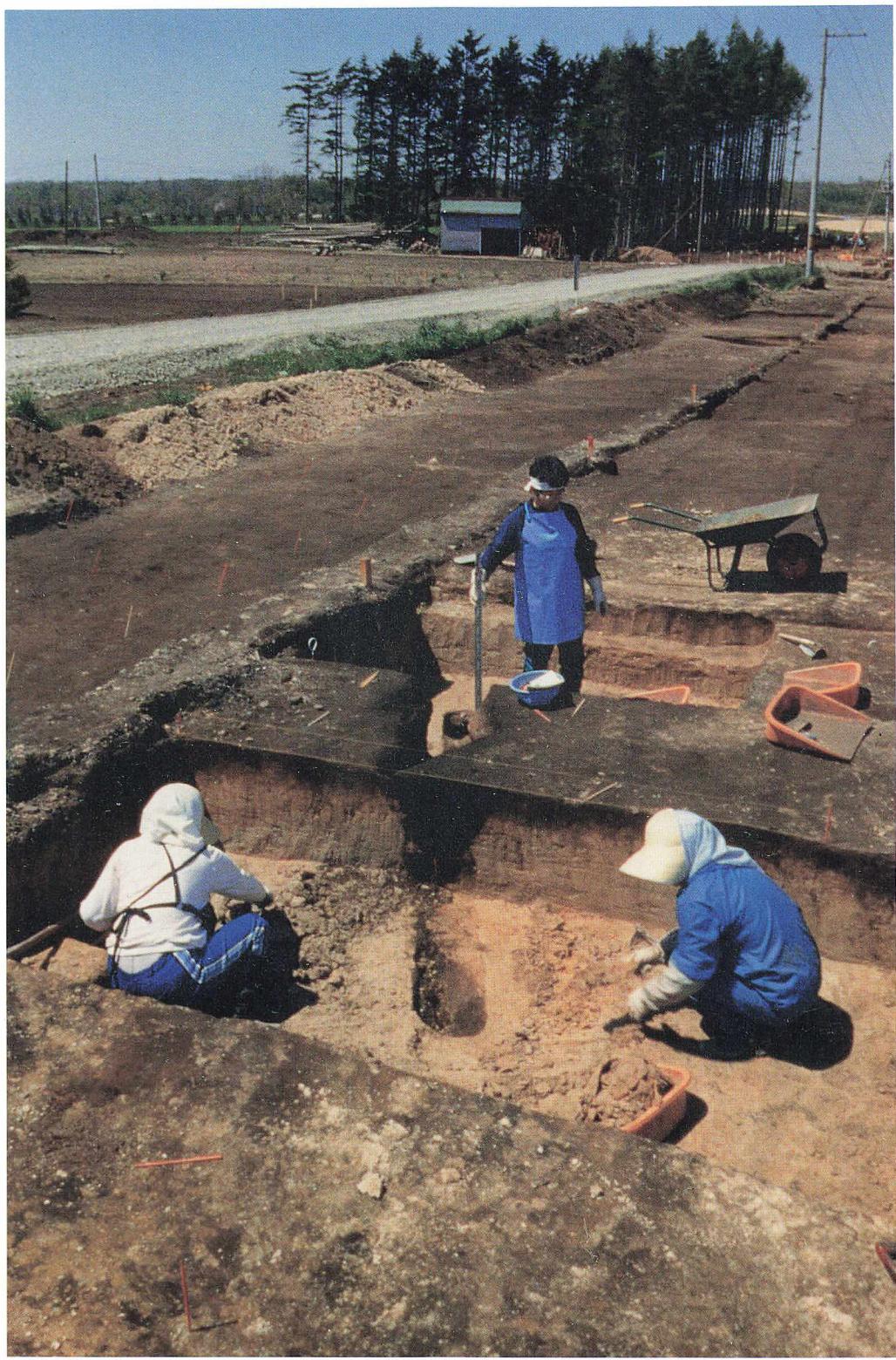
# 西 野 幌 11 遺 跡

—道々野幌総合運動公園線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

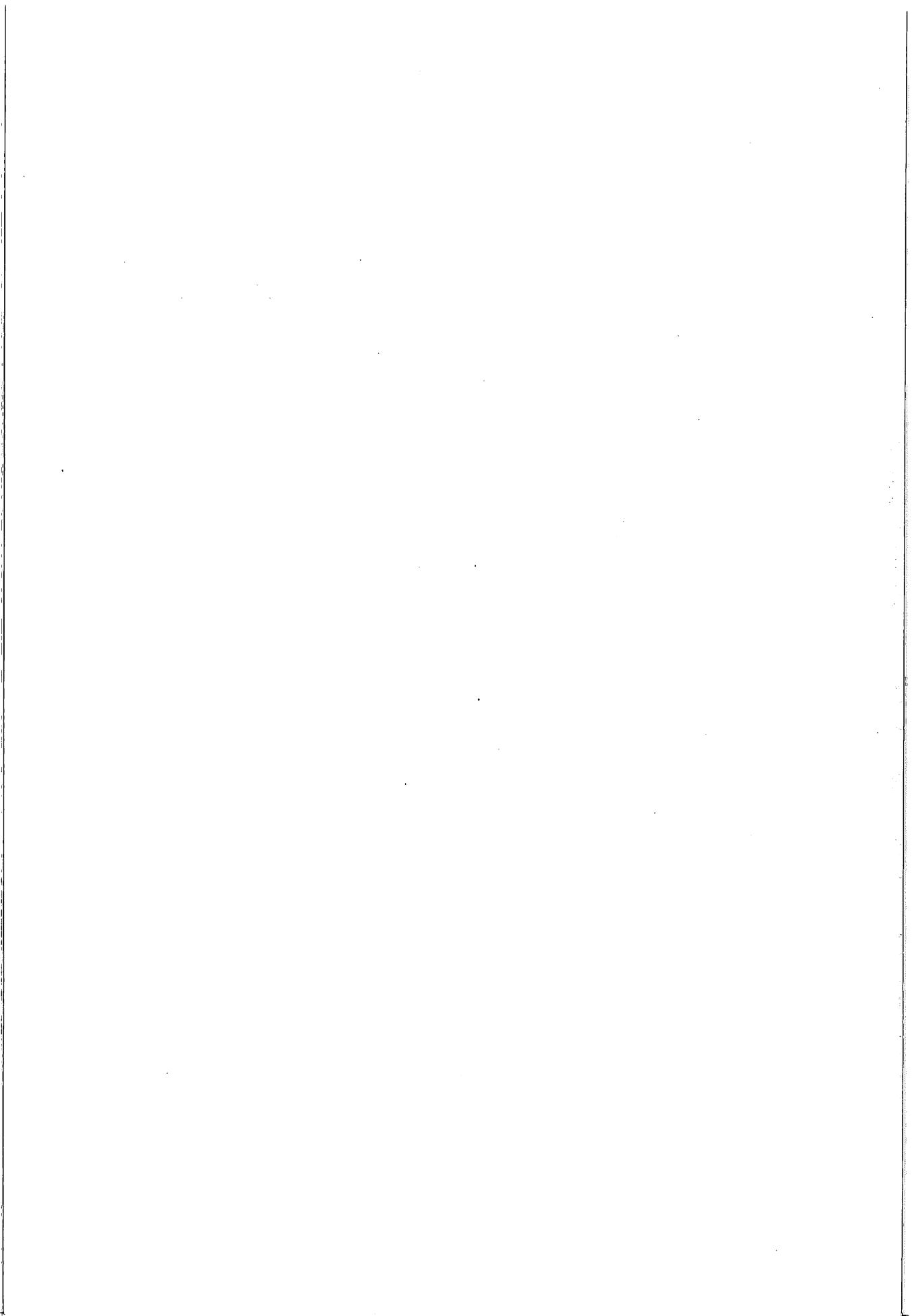
昭 和 60 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





Tピットの調査



## 例　　言

1. 本書は、道々野幌総合運動公園線改良工事にともなう西野幌11遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、北海道教育委員会の指示により、札幌土木現業所の委託を受けて、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査の期間は、発掘調査が昭和60年5月7日から5月31日、室内整理が昭和60年11月7日から昭和61年3月31日である。
4. 本書の作成は、調査第二班の種市幸生、田才雅彦、田口尚、寺崎康史が行なった。文責は各文章の末尾に記した。なお、TP-6覆土採取の植物遺体の分析は矢野牧夫氏に依頼した。
5. 調査にあたっては、江別市教育委員会の協力を得た。また次の諸機関及び人々の指導助言を得た。北海道開拓記念館、苫小牧市埋蔵文化財調査センター、札幌市教育委員会埋蔵文化財調査室、帯広市百年記念館、矢野牧夫、北川芳男、三野紀夫、山田悟郎、佐藤一夫、宮夫靖夫、工藤肇、渡辺俊一、大泉博嗣、上野秀一、田部淳、田村リラコ、木村哲朗、西島毅、佐藤孝則、北沢実、山田秀三、萩中美枝、(順不同、敬称略)

# 目 次

## 例 言

### I 調査の概要

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	1
4 遺跡の立地と周辺の遺跡	4
5 発掘区の設定	6
6 層序	6

### II 遺構と遺物

1 Tピット (TP-6)	9
2 土器	14
3 石器	20

### III まとめ

1 Tピット	25
2 遺物	26

### IV 西野幌 11 遺跡 (TP-6) 出土の植物遺体

28
----

# I 調査の概要

## 1 調査要項

事 業 名 道々野幌総合運動公園線埋蔵文化財発掘調査  
委 託 者 札幌土木現業所  
受 託 者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
遺 跡 名 西野幌 11 遺跡 (A-08-82)  
所 在 地 江別市西野幌 475-4 他  
調 査 面 積 2,387 m<sup>2</sup>  
調 査 期 間 昭和 60 年 4 月 27 日～昭和 61 年 3 月 31 日

## 2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター	理 事 長	植村 敏
	専務理事	山本 慎一
	常務理事	藤本 英夫
	業務部長	間宮 道男
	調査部長	中村 福彦
	調査第二班長	種市 幸生 (発掘担当者)
	文化財保護主事	田才 雅彦
"		田口 尚
嘱託		寺崎 康史

## 3 調査の経緯

札幌土木現業所では、野幌総合運動公園の造成に伴い、野幌総合運動公園線の整備・拡幅に着手することとなり、昭和 58 年 6 月 10 日付で北海道教育委員会に、埋蔵文化財の保護について事前協議書を提出した。

北海道教育委員会では、工事計画に従って、昭和 59 年 11 月 13・14 両日にわたって範囲確認調査を行った。その結果、1,600 m<sup>2</sup> について工事着工前に発掘調査が必要となった。また、現道下の部分については範囲確認調査を実施することが不可能なため、周辺の状況などから、発掘が必要な面積を 500 m<sup>2</sup> と見込み、計 2,100 m<sup>2</sup> を調査するということで 1 回目の契約を行った。しかし、実際に発掘調査を進める過程で部分的な面積の出入りがあり、最終的に 2,387 m<sup>2</sup> となった。

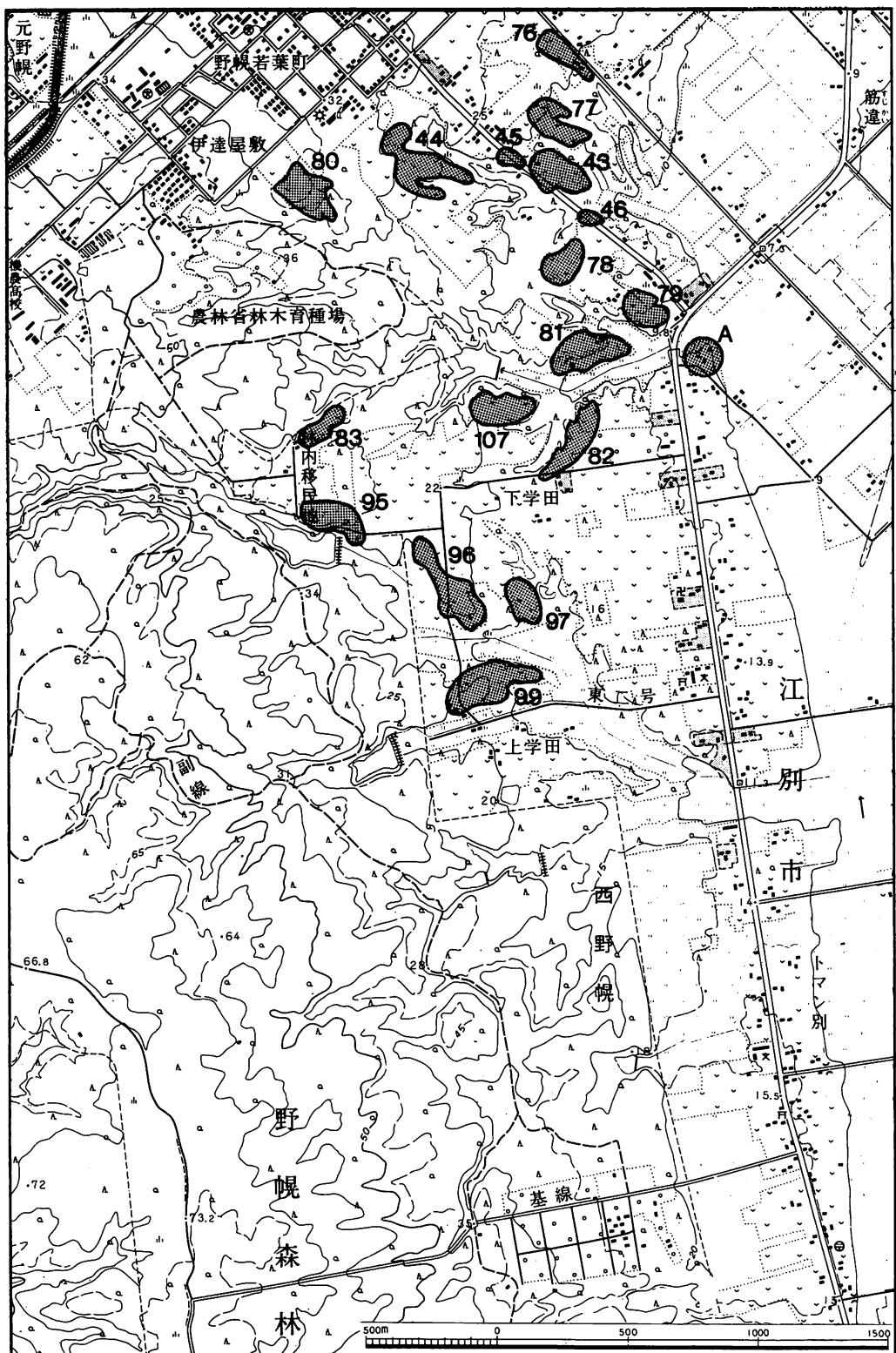


図 I 西野幌II遺跡及び周辺の遺跡の位置

(この地図は国土地理院発行の2万5千分の1の地図(野幌)を複製したものである。)

西野幌 11 遺跡及び周辺の遺跡

No.	遺跡名	時 期	内 容	調 査	文 献
43	東野幌 1	縄文時代中～晚期	墓壙・Tピット他	昭和54年	①
44	西野幌 1	縄文時代中期、続縄文時代	住居跡・墓壙他	昭和54年	①
45	西野幌 2	縄文時代	未詳		
46	西野幌 3	縄文時代中・後期	住居跡	昭和54年	①
76	東野幌 4	縄文時代中期	住居跡・Tピット他	昭和54年	②
77	東野幌 5	未詳	未詳		
78	西野幌 7	未詳	未詳		
79	西野幌 8	未詳	未詳		
80	西野幌 9	未詳	未詳		
81	西野幌10	未詳	未詳		
82	西野幌11	縄文時代前～後期	Tピット・土壙他	昭和58～60年③・④	
83	下学田	縄文時代中期	未詳	昭和59年	④
95	西野幌14	縄文時代中期	未詳	昭和59年	④
96	西野幌12・17	縄文時代中～晚期、続縄文時代	住居跡・墓壙他	昭和57～60年③～⑤	
97	西野幌15	未詳	未詳		
99	西野幌16	縄文時代中期	未詳		
107	西野幌13	縄文時代早・中期	住居跡・Tピット他	昭和58年	③
A	千 古 園	擦文時代 (?)	未詳		

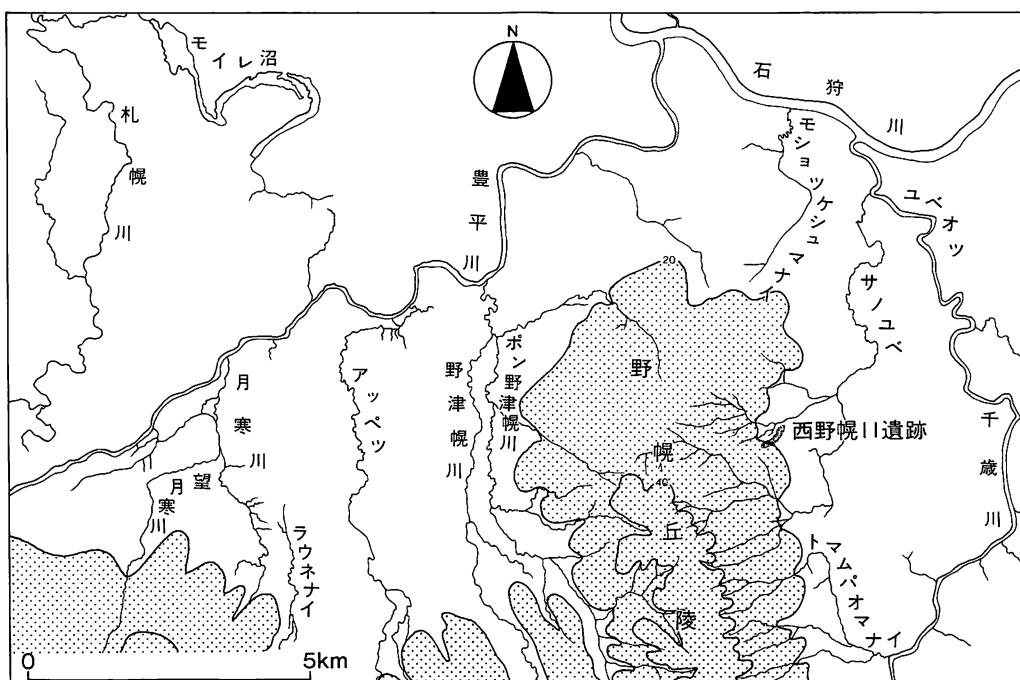


図2 明治29年頃の河川

(この図は北海道仮製版5万分の1地形図の札幌、江別、平岸、長都の一部をもとに作図したものである。)

#### 4 遺跡の立地と周辺の遺跡

野幌丘陵は、札幌市内を貫流する豊平川と、支笏湖に端を発して石狩川へと注ぐ千歳川に挟まれた標高50～100mの丘陵である。このうち狭義の野幌丘陵と呼ばれているのは、野津幌川と裏の沢川とを結ぶ線以北の部分で、更に丘陵本体部と、それを取巻く台地面（大麻一もみじ台面、江別面、下学田面）とに区分されている。西野幌11遺跡の所在する下学田面は、丘陵東側中央部に広がる標高20～30mの面で、下学田、上学田付近で15/1,000の勾配をもっている。北海道開拓記念館研究報文によれば、表層堆積物は支笏軽石流堆積物起源の火山噴出物を多量に含む元野幌層の粘土とは異なり、小野幌層の粘土（少量の軽石片を含む火山灰質粘土）であり、その堆積年代は最終氷期の第1氷河期（古ゾルム氷河期、72,000～44,000年前）からゲトワイグル氷河期（44,000～29,000年前）の間で、支笏軽石流堆積物（32,000年前）より古い時期としている。

丘陵東側は、西から東へほぼ平行して流れる多くの河川によって開拓されているが、西野幌11遺跡はサノユベ（早苗別川）<sup>すじかい</sup>支流の筋違川右岸、標高12～20mの地点に位置している。

この辺りは、比較的埋蔵文化財の調査が密に行なわれており、数多くの遺跡の所在が知られているが、そのうち9か所の遺跡が発掘調査されている。これらの遺跡では、竪穴住居跡や墓壙が例外なく確認されており、西野幌11遺跡でも、東側部分の未調査区にその存在が予想される。主体となる時期は概ね縄文時代中期・後期であり、他の時期の単純遺跡としては、丘陵東端に位置する千古園遺跡（擦文期）が知られているだけである。 (田才 雅彦)

#### 註

サノユベ及びその親川であるユベオツの解釈について山田秀三氏は、「既にわからなくなつた地名であるが、ユベオツは yupe・ot〔蝶鮫・多くいるところ〕とする永田方正氏の見解を探りたい。」とし、サノユベについては、「現在、早苗別川と呼ばれている点から、sana-yupe・ot（otは下略）で〔浜（石狩川畔）の方にある江別川〕であろう。」とされている。

#### 引用・参考文献

- ① 勘北海道埋蔵文化財センター 1980 「大麻1遺跡・西野幌1遺跡・西野幌3遺跡・東野幌1遺跡」
  - ② 江別市教育委員会 1981 「東野幌4・元江別3」
  - ③ 勘北海道埋蔵文化財センター 1984 「西野幌11、12・17、13遺跡（概報）」
  - ④ " 1985 「西野幌11、西野幌12・17、西野幌14、下学田遺跡（概報）」
  - ⑤ " 1983 「西野幌12遺跡（概報）」
- 江別市教育委員会 1983 「北海道江別市埋蔵文化財分布調査報告書」
- 北海道教育委員会 1984 「昭和58年度江別地区遺跡分布特別調査報告書」
- 北川芳男他 1974 「野幌丘陵周辺の第四紀に関する諸問題」『北海道開拓記念館研究年報第3号』
- 北海道開拓記念館 1981 「野幌丘陵とその周辺の自然と歴史」『北海道開拓記念館研究報告第6号』
- 矢野牧夫・山田悟郎 1982 「北海道野幌丘陵北部に分布する最終氷期堆積物の粘土層」『北海道開拓記念館研究年報第10号』
- 成田英吉他 1983 「北海道せっ器粘土鉱床開発に関する研究 その1 野幌地区」『地質調査所月報第34卷第3号』



図3 遺跡周辺の地形  
1. 西野幌10 2. 西野幌11 3. 西野幌13  
4. 西野幌15 5. 西野幌12・17の各遺跡

## 5 発掘区の設定

当遺跡は、道立野幌総合運動公園造成工事にかかる埋蔵文化財包蔵地（西野幌11、西野幌12・17、西野幌14、西野幌15、西野幌16、下学田遺跡）のうちの、西野幌11遺跡と同一遺跡のため、当遺跡の発掘区の設定は、その造成工事にかかる包蔵地の発掘調査の際に使用した発掘区をそのまま用いることにした。

造成工事にかかる包蔵地の発掘調査の際に用いた発掘区は、先の包蔵地をすべて網羅できるように考慮したため、造成工事用に設けた工事区の杭を活用することにした。その工事区は道々江別－恵庭線と大沢第一貯水池にはいる道々野幌運動公園線とが交差する交点から、直交座標値を割り出し、設定したものである。その座標値は、N-6°15'-Wである。工事用杭は、交点から西方向へ40mごとにサブポイントを設けている。

発掘区の基点は、そのサブポイント400から北へ440mのところに設置した。この基点を中心<sup>1</sup>に10m×10mの区画と、さらにこれを4分割する方法を用いた。すなわち、西方向のラインに沿って10mごとに、1、2、3、……88、これと直交するラインを10mごとに、1、2、3、……88とした。小グリットの場合は、大グリットを4つに区切って北東から逆時計まわりに、a、b、c、dと呼称した。これにより、基点の5m×5mの発掘区はo-o-aと表示される。なお、当遺跡発掘区の南西隅に小沢がありこんでいたため、沢を境にして東側をA地区西側をB地区と便宜上呼ぶことにした。

(種市 幸生)

## 6 層序 (図-4)

土層観察にあたっては、東西は43ライン、南北は15、22ラインをメイン・セクションとした。調査区は、耕作地と現道下部分となっており、いずれも遺物包含層であるII層上半部までは攪乱を受けていた。A地区13ライン以西においてはIII層、IV層にまで攪乱が及んでいた部分もある。

I層 耕作土

II a層 黒色土 ポロボロとした5mm大の粒状を呈す。

II b層 黒褐色土 粒子細かく、やや粘性がある腐植土。本来の遺物包含層と思われる。

II c層 暗褐色土 II b層に似るが、色調がやや明るい。

III層 暗茶褐色土 II層とIV層の漸移層。平均層厚15cm程である。

IV層 黄褐色土 粒子細かく、粘性強い。灰白色シルト層をブロック状に含む粘土質土層。

また、II'・III'としたものは風倒木等の自然営為による攪乱で、黄褐色粘土粒子を少量混じるものであり、IV'は風倒木により、浮き上がったIV層より明白白色を帯びる土層ブロックである。

(寺崎 康史)

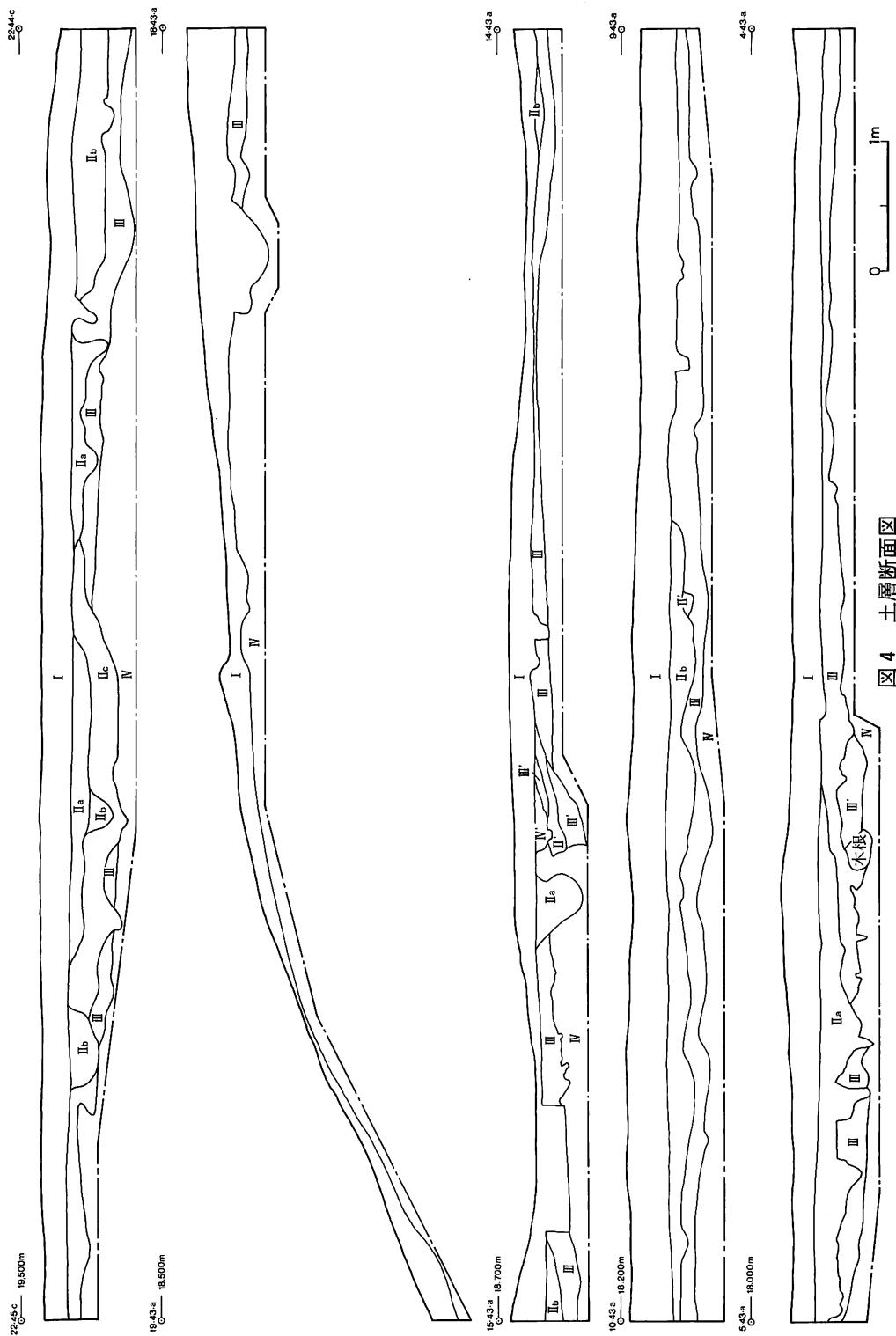


図 4 土層断面図

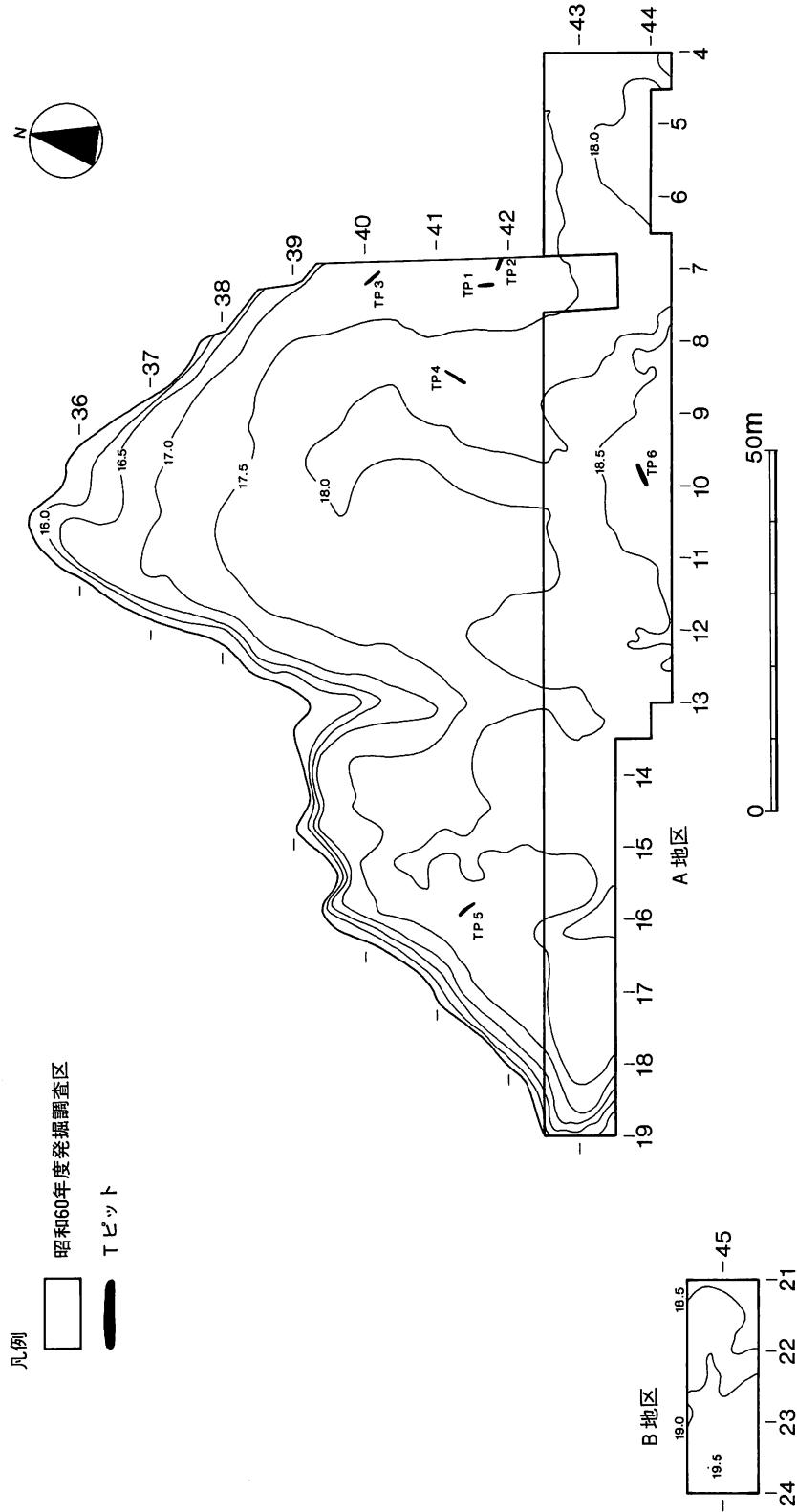


図5 発掘調査区平面図・Tビット分布図

## II 遺構と遺物

### 1 Tピット (TP-6)

今回の調査で確認したTピットは1基であるが、昭和57・58両年の調査で確認されたTピットが5基あり、互いにその配置に関連性があることから一連番号を与えることとした。

#### 〈調査方法〉

このTピットを調査するにあたって、次の点に留意した。

- ① 壁面及び底面を精査し、掘削具の痕跡確認に努める。
  - ② 覆土の質及び各層の量と、自然堆積層とを比較・観察し、使用状況を究明する。
  - ③ 覆土、特に壙底部の土壤試料を採取し、Tピット使用時の環境を把握する。
- 以上の諸点を考慮し、調査方法は次の手順を踏んだ（巻頭写真、図-9、図版-III・IV参照）
- ① プランを確認した段階で、グリッドラインに沿って三分する。（図-9・A～C）
  - ② A・B部分の覆土を厚さ5cm掘り下げる。（掘削具の痕跡確認・土壤試料採取）
  - ③ 外側部分を同様に5cm掘り下げる。
  - ④ プラン実測。
  - ⑤ 壙底面まで②～④を繰り返したのち、土層断面実測。（図-6）
  - ⑥ 残ったC部分も同様の手順で掘り下げる。

尚、Tピットを縦或いは水平方向にスライスした例としては、S 265遺跡（内山1977）、美沢4遺跡（本村1980）、美々8遺跡（森田1981）などがある。

#### 〈形状〉

長軸：確認面（III層上面）の長さ3.30m、底面の長さ3.34m。

東側部分にオーバーハングが見られるが、底面に残る掘削痕などからして構築時よりこうした形になっていたことが判る。

短軸：確認面の最大幅0.53m、最小幅0.37m。

中央部及び東側部分にふくらみが見られるが、本来は幅0.40m前後で平行していたと考えられる。

底部の最大幅0.18m、最小幅0.10m。

各所に凹凸が見られる。これは壁面にも見られるもの（図-8）で、本ピットを掘削した時の工具の痕跡と考えられる。

深さ：確認面より最大値1.10m。

これらの数値は以下の一覧表に示すように、先に調査された5基のTピットとさほど大きな隔りはない。（TP-2は一部範囲外で未調査のため、確認部分のみの数値）

深さ：確認面よりの最大値1.10m

これらの数値は以下の一覧表に示すように、先に調査された5基のTピットとさほど大きな隔りはない。(TP-2は一部範囲外で未調査のため、確認部分のみの数値)

TP No.	長 軸		確 認 面 短 軸		底 面 短 軸		確認面より の 深 さ	底部長短比 (長軸長 / 短軸最大幅)
	確 認 面	底 面	最 大	最 小	最 大	最 小		
1	3.30m	3.30m	0.60m	0.31m	0.13m	0.07m	0.86 m	25 m
2	2.30	1.90	0.70	0.50	0.23	0.15	1.00	—
3	3.12	3.06	0.50	0.28	0.15	0.10	推定 0.88	20
4	3.28	3.36	0.64	0.60	0.16	0.08	0.88	21
5	2.84	3.12	0.38	0.22	0.12	0.07	0.88	26
6	3.30	3.34	0.53	0.37	0.18	0.10	1.10	19

表1 各Tピットの計測値

#### 〈覆土〉

分層及び注記に際しては、自然堆積層との対比に注意を払った(図-7)。主たる対比関係は次のとおりである。

II層：1・2・7

III層：4・8・12

IV層：3・3'・5

V層：5・6の中にブロック状に入る

VI層：6・10

自然堆積層に対比することが難しいもの：9・11・13・14

また、確認面以下の覆土総量は0.915m<sup>3</sup>の値が得られている。

壁面は、確認面よりほぼ30cmの深さまで全体に崩落が見られる。それ以下については、部分的に若干の崩落が見られる程度で概ね原形を保っている。 (田才 雅彦)

#### 〈遺物〉(図-8、図版-III・IV)

Tピット内からの遺物は6点であり、いずれも覆土出土のものである。

1は、斜行縄文が施され厚手であり、色調は赤褐色を呈し、焼成は良い。同一個体と思われる小破片が他に2点ある。縄文時代後期初頭の余市式系の土器と思われる。覆土1からの出土である。

2は黒曜石製の石匙で、つまみ部のみが残存する。覆土2より出土した。

以上の他に、覆土4から、黒曜石製の碎片が1点出土している。 (寺崎 康史)

#### 引用・参考文献

内山真澄 1977 「札幌市文化財調査報告書 XV」 札幌市教育委員会

木村尚俊他 1980 「フレペツ遺跡群」 勘北海道埋蔵文化財センター

森田知忠他 1981 「美沢川流域の遺跡群V」 勘北海道埋蔵文化財センター

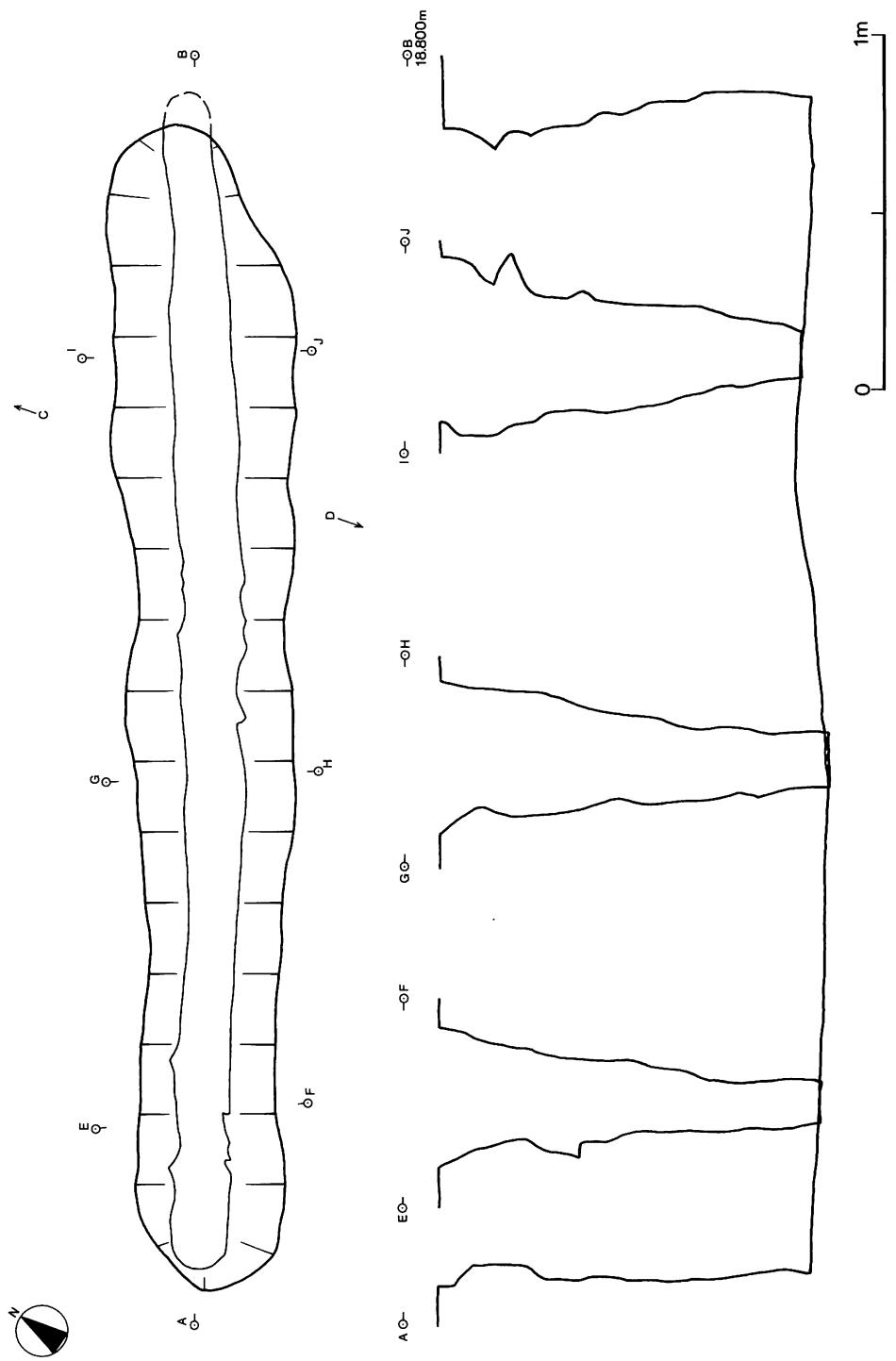


図6 Tピット平面図及び断面図

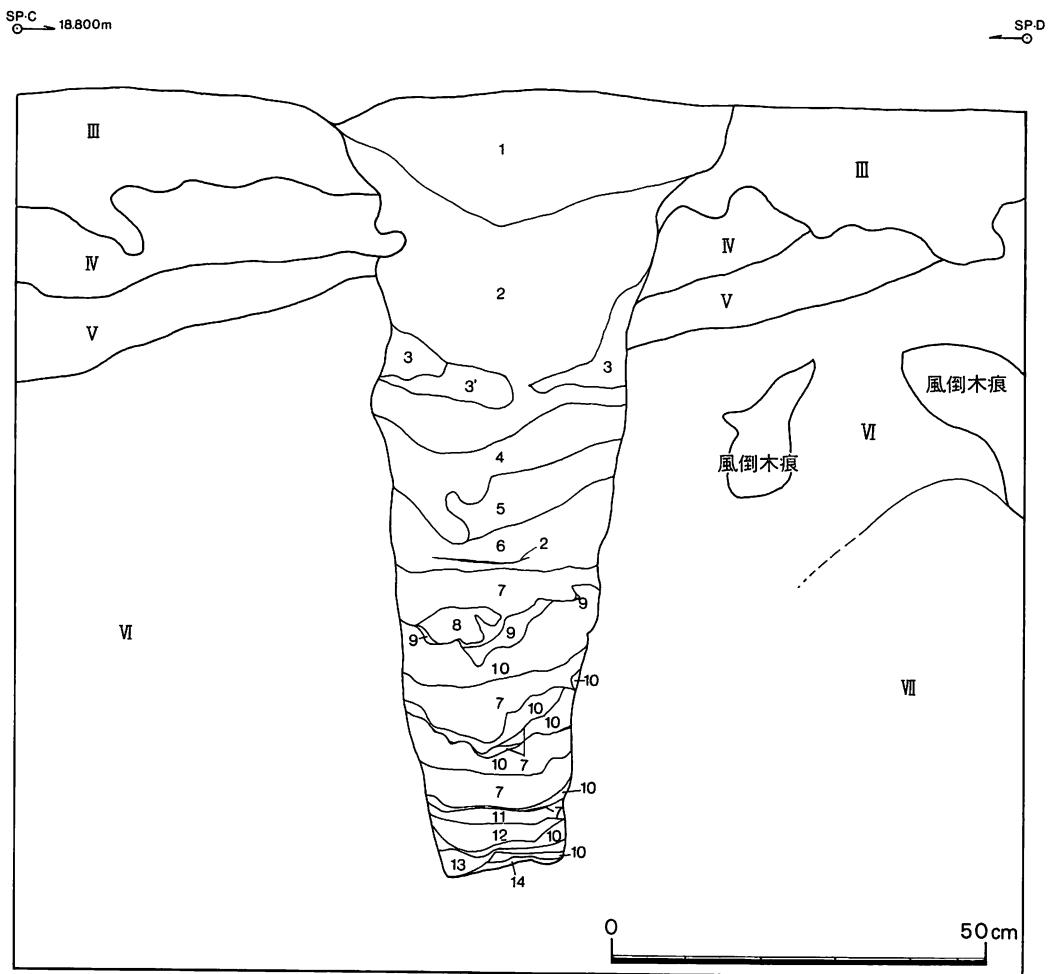


図7 Tピット土層断面図

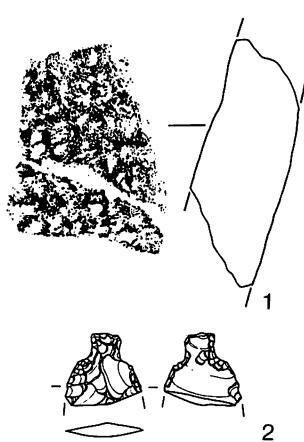


図8 Tピット覆土遺物 (1/2)

TP-6 覆土土層

- 1 黒色土 (II層)
- 2 黒褐色土 (II層に2~3 mm大の粘土粒を含む)
- 3 黄褐色土 (IV層に黒色土が少量混ざる)
- 3' 暗黄褐色土 (IV層に暗茶褐色土が混ざる)
- 4 暗茶褐色土 (III層に黒色土が斑状に混ざる)
- 5 黄褐色土 (IV層に由来するが、より柔かい。4層との境は不明である)
- 6 灰褐色土 (VI層に由来し、3~5 mm大の軽石を含む)
- 7 黒色土 (II層に対比でき、より粘性が強い)
- 8 暗褐色土 (III層に黒色土が混ざる)
- 9 明褐色土 (5層に似る)
- 10 灰褐色土 (VI層に由来し、黒色土粒を少量含む)
- 11 明茶褐色土 (粒子細かく、粘性強い。遺構周辺の自然層にはみられない)
- 12 黑褐色土 (2~8 mm大の灰褐色土粒を斑状に含む)
- 13 灰褐色土に黒色土を混じる
- 14 黑褐色土 (粒子細かく、粘性が強い。炭化物片を含む)

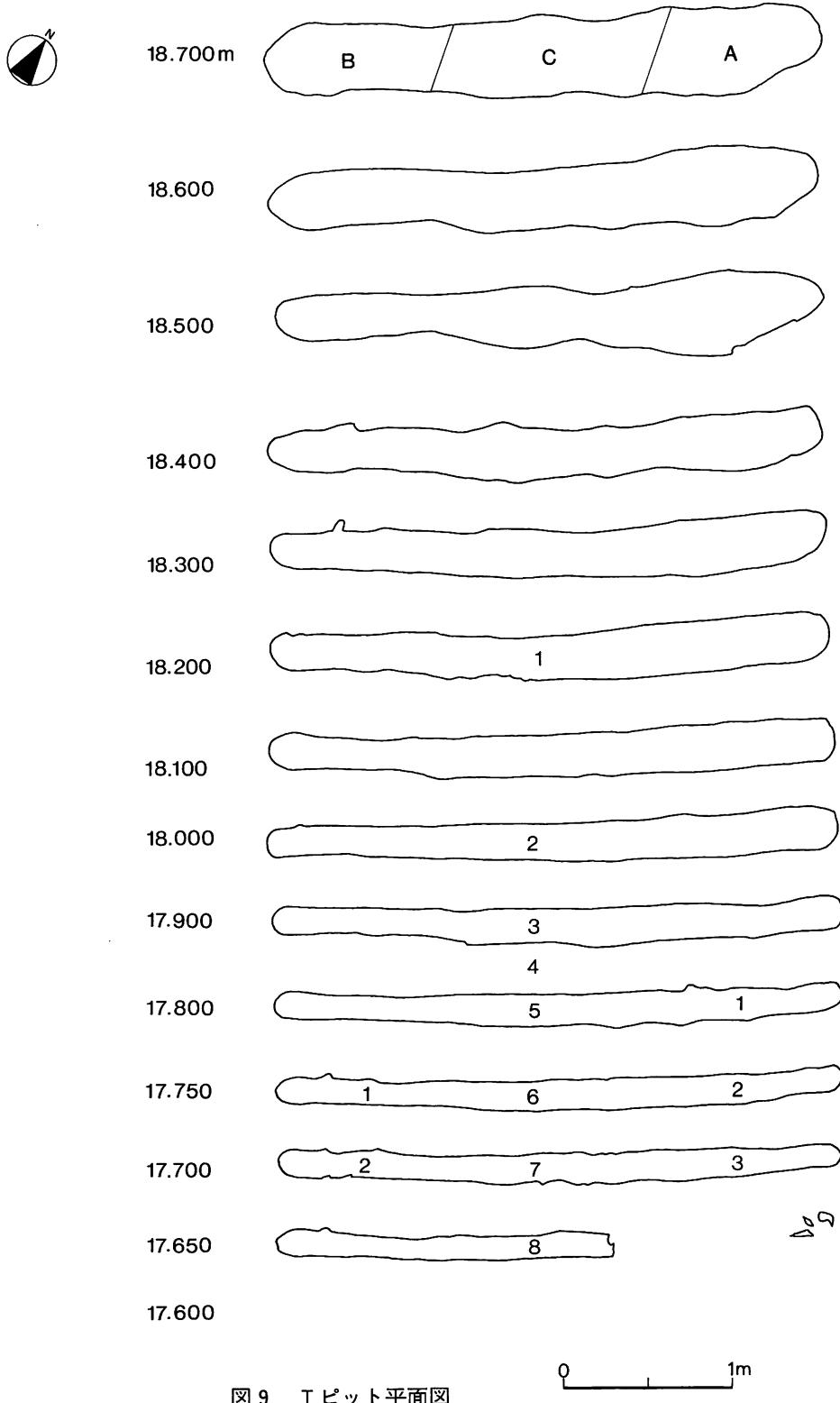


図9 Tピット平面図

## 2 土 器 (図-10~13、表-1、図版-VI~VIII)

発掘調査によって得られた土器は総数 399 点である。出土した土器は、ほとんどが細片で、表・裏面の摩滅や剥落が著しい資料ばかりであった。かろうじて文様のわかるものは極力掲載することとした。

分類は、文様、器厚、胎土、焼成などから大別し、縄文時代中期中葉から末葉の土器を第 1 群、縄文時代後期の土器を第 2 群とした。さらに第 2 群は、縄文および幅広の貼付帯を主体とする土器と沈線文を主体とする土器に細分され、前者を a 類、後者を b 類とする。

### 第 1 群土器 (図-10、1~10)

1 は肥厚した口縁部に半截竹管状工具を押し引いた文様が施されている。胎土には砂粒が多く焼成は良好である。2 は肥厚した口縁部に縄線文が 4 条施されている。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。3 は口縁部付近の破片で地文の斜行縄文の上から半截竹管状工具による押引きと竹管状工具による刺突文が施されている。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。4 は口縁部付近の破片で地文の斜行縄文の上部に縄線文が 2 条施されている。胎土には砂粒が多く脆い。焼成はあまり良くない。5 は結束第 2 種の縄文が施され、器内面の調整が丁寧である。胎土には細砂粒が多く、緻密である。焼成は良好である。6~8 には結束第 1 種の羽状縄文が施され、7 の器面は縄文施文後になでられている。6~8 にはいずれも内面に縄文が施文されており、その胎土中には纖維が含まれ、焼成は良くない。9 は底がくの字状に張り出す底部破片である。底の器厚は薄く、器内面、底面ともよくみがかれている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。10 は9 と同様に底がくの字状に張り出す底部であるが、底の器厚は9 に比べて厚い。胎土には砂粒を多く含み脆く、焼成もあまり良くない。

第 1 群の土器を各型式に分類するならば、1・2・9 が天神山式土器に相当する資料で、3~5・10 は紅葉山式あるいは柏木川式に類する資料と考えられる。6~8 は、いずれも胴部破片であるが施文、胎土から北筒式土器に類する資料と考えられる。

### 第 2 群 (図-10、11~13、図-11~13)

#### a 類 (11~20)

11 は口唇断面が丸く、やや内反する口縁部である。器内・外面ともに斜行縄文が施されている。胎土には細砂粒を含み、焼成は良好である。12 は口唇断面が四角く、器面に太めの原体による斜行縄文が施され、不鮮明であるが口唇端にも同一原体による押圧縄文が部分的に認められる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。13 は口唇部の器厚が口縁部よりも薄く、その断面は丸い。口縁部はやや外反し、器面には斜行縄文が施され、器内面には指頭による調整が認められる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。14 の口唇断面は四角く、口縁部に幅広の貼付帯と円形刺突文がめぐっている。器面、貼付帯には斜行縄文が施され、口唇端にも同一の原体による押圧縄文が施されている。胎土には石英、黒雲母を含む砂粒が多い。焼成は良好である。15 は14 と同類の別個体で器面と貼付帯にそれぞれ異った原体による縄文が施されている。胎土および焼成は14 と同様である。16 は口唇断面が四角く、口唇端に押圧縄文が施され

ている。口縁部は、くの字状に屈曲し、外に開いている。器面にはその屈曲部を境いに異なる2つの原体によって羽状に縄文が施されている。胎土には3～5mm大の砂礫を含み、焼成は良好である。17は口唇断面が四角く、押しつぶされたように粘土が僅かに張り出している。口唇端には撫糸の圧痕が認められる。器面には羽状に縄文が施され、器内・外面から穿孔された補修孔がある。胎土には細砂粒多く、焼成は良好である。18～20は胴部破片で器面に斜行縄文が施されている。20の縄文原体は太く、施文および器内面の調整は粗雑である。胎土は18に2～5mm大の砂礫が、19、20には砂粒が多い。焼成は3点とも良好である。

#### b類 (21～38)

1～26は同一個体の口縁および胴部破片である。器形は深鉢形を呈する。口唇断面は四角く、平縁な口縁である。器面および口唇端は縄文施文後に、調整がくわえられている。さらに器面には先端の丸い工具による太めの横走する沈線が数段めぐり、その沈線で区画された中に「」や「」が連続して施文されている。胴部下位には沈線による文様帶はなく、調整された地文がわずかに認められる。胎土には石英や黒雲母の混った細砂粒が含まれ脆い。焼成は良くない。27・29・30は同一個体の口縁および底部破片である。器形は口縁部がやや括れる深鉢形である。口唇断面は四角く、口縁部は外反する。1～26同様に器面の縄文を調整したのちに太めの沈線で直線的な幾何学文様が施文されている。胎土には黒雲母の砂粒が多く含まれており、堅い。焼成は良好である。28は胴部破片で器面に斜行縄文が施され、その上部に鋭利な工具で沈線が施文されている。胎土には砂粒が含まれ、焼成はあまり良くない。31は胴部下位の破片である。破片上部には斜行縄文が施文され、その下は縦位に磨かれている。胎土には砂粒を含み、堅い。焼成は良好である。32は底部破片で縦位に器面が調整されている。胎土には砂粒が多く脆い。内面上部や器面は斜行縄文が施されたのち調整されている。口唇端にも同一原体による押圧縄文が施されている。器面には太い2本1組の平行沈線が数段めぐり器面を区画している。その区画された中には「」が連続してめぐっている。器内・外面には煮こぼれと考えられる炭化物が付着している。また、器内・外面より穿孔した補修孔がある。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。34～36は同一個体の胴部破片である。地文の斜行縄文の上から沈線が鋸歯状あるいは半孤状にいくつも施文されている。胎土は緻密で堅い。焼成は良好である。37は胴部破片で異なる原体の縄文が縦横に施文されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。38は底部破片で、底に粘土紐が貼付された上底である。器面には異なる2つの原体で羽状に縄文が施され、その上をなでて調整している。胎土は緻密であるが若干纖維を含む。焼成は良好である。37・38は第1群あるいは第2群a類の可能性もある。

第2群の土器を各型式に分類するならば、第2群a類は余市式土器に類する土器群、第2群b類の21～33は入江式土器に相当する土器群、34～36は堂林式土器あるいは三ツ谷式土器に類する土器群と考えられる。

(田口 尚)

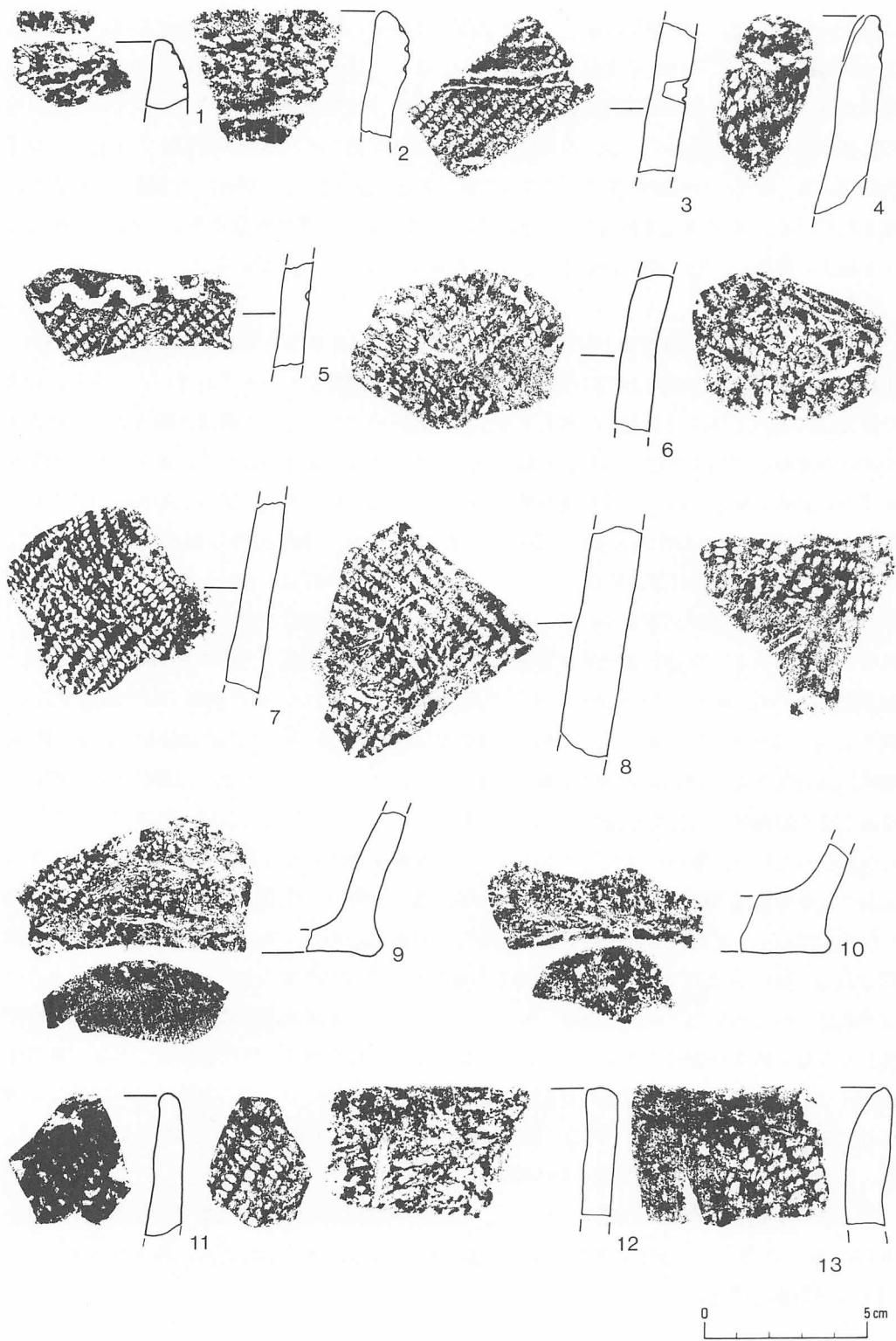
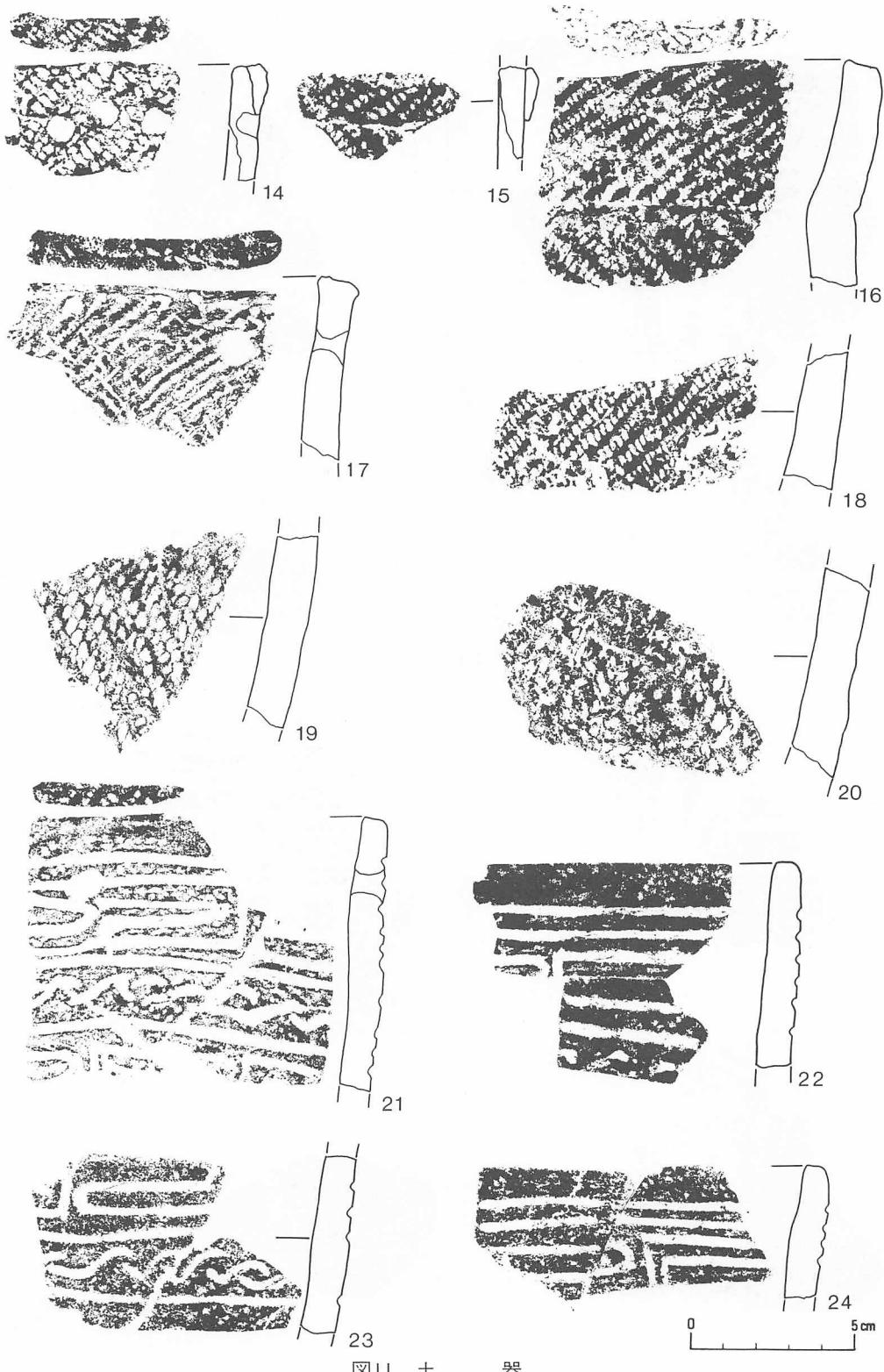


図10 土 器



図II 土 器

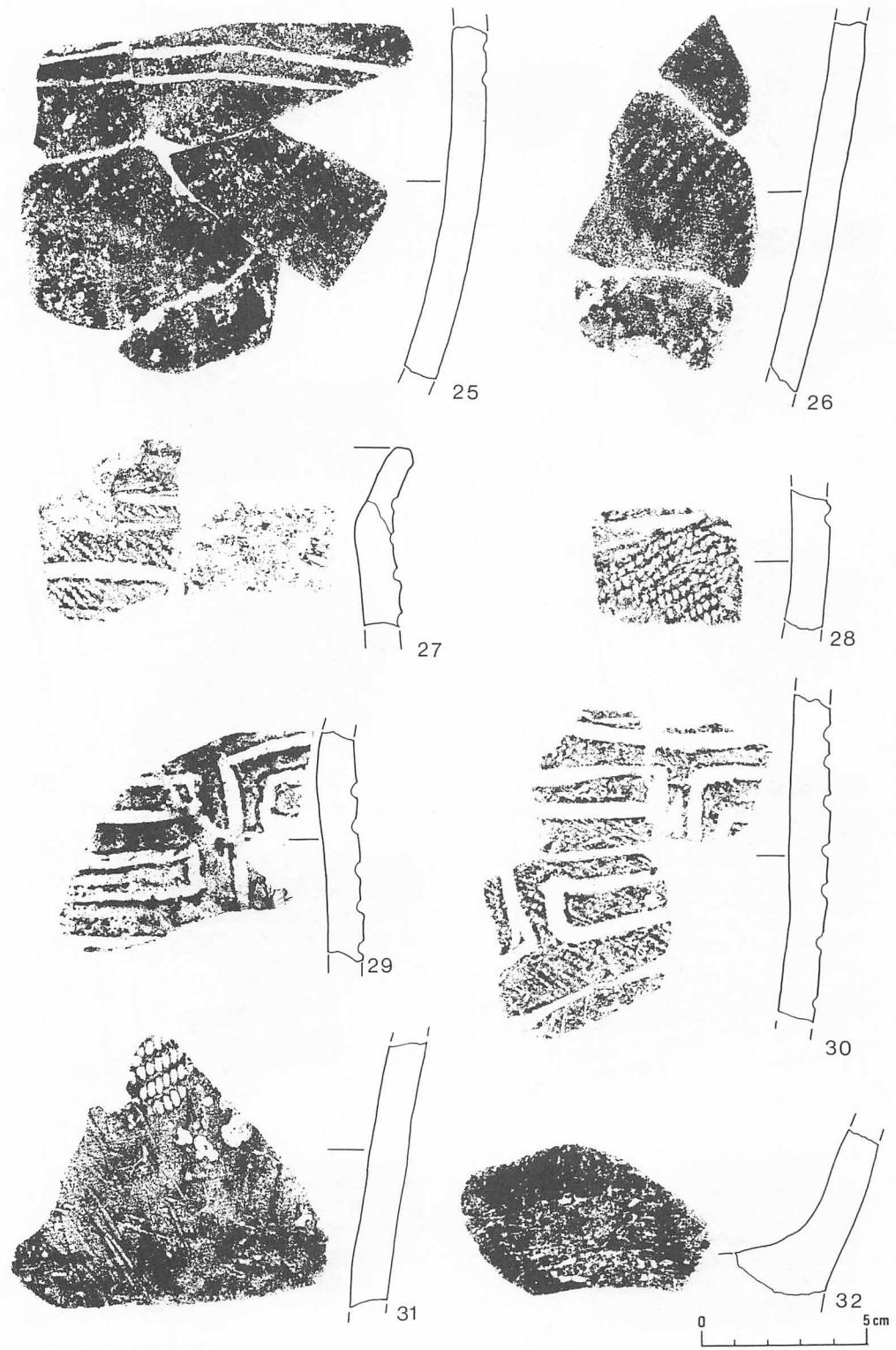


図12 土器

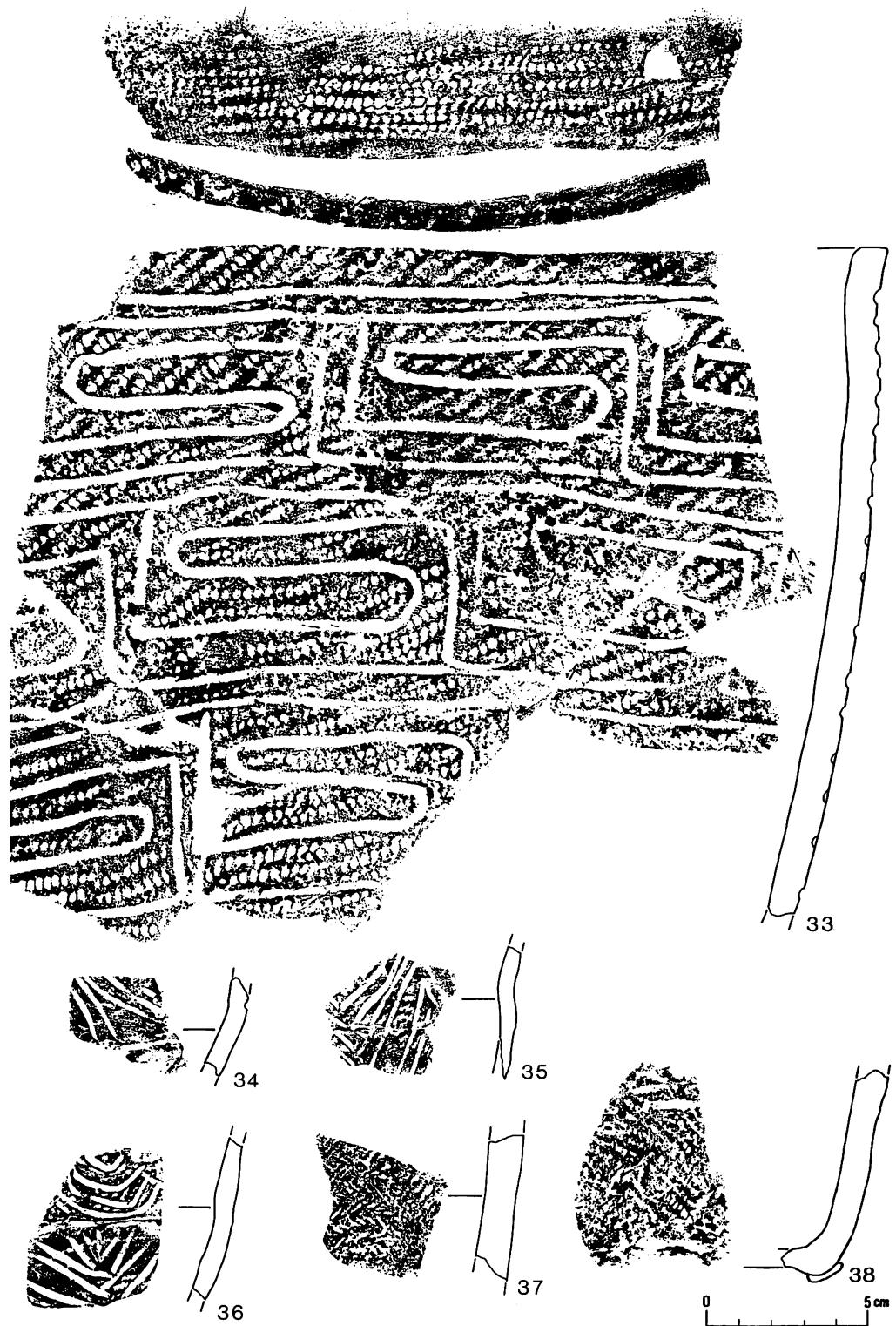


図13 土 器

### 3 石 器 (図-14~16、表-3、図版-IX)

発掘調査によって得られた石器総数は149点である。その内訳は、剥片石器27点、石核2点、剥片・碎片88点、礫石器15点、礫17点となっている。以下、剥片石器、石核、礫石器の主な器種について説明を行なう。

#### (1) 剥片石器

剥片石器としたものには、石鏃3点、石槍3点、石錐1点、石匙2点、搔器2点、二次加工を有する剥片14点、使用痕を有する剥片2点があり、後二者を除く、全点を図示した。

##### 石鏃 (図-14、1~3)

1・3は全体の形状は知り得ないが菱形を呈すると思われる。2は素材である剥片の周辺のみを加工して、若干のかえりをつけた有茎石鏃。2・3とも、横長の剥片を素材としている。

##### 石槍 (図-14、5~7)

5は基部を欠損しているが、木葉形を呈すると思われる。6は棒状の茎部と深いかえりを有する。身部を欠くが、7も同様の形状であろう。

##### 石錐 (図-14、4)

断面が厚い凸レンズ状を呈する。急峻な加工で先端部を調整している。

##### 石匙 (図-14、8・9)

2点とも、縦長剥片の打点部を上方に設定し、両側縁に刃部を作出している。頁岩製である。

##### 搔器 (図-14、10・11)

ともに、背面に礫面を残す、部厚い剥片を素材とし、長軸に対して右下がりの鈍角なスクレーパー・エッジを作出している。

#### (2) 石核 (図-14、12・13)

2点の出土である。12は長方体を呈し、打面は長軸両端に設けられており、長さ約5cmの縦長剥片を主体に剥片剝離が行なわれている。13は側面形が三角形の角柱形を呈し、その一面を打面に設定し、剥片剝離がなされている。また、打面とした面も作業面であったと思われる。

#### (3) 矽石器

石斧5点、石錐1点、北海道式石冠1点、凹石1点、砥石1点、擦石1点、石斧片5点の出土である。

##### 石斧 (図-15、14~18)

14・15は素材、形状において類似するものであり、礫面を残し、15は刃部のみ、14は礫面に若干の磨痕がみられる。18も、刃部のみに磨痕がある。16は、ほぼ全面磨製であり、17は、石斧破損品の再加工品と思われる。

他に、長軸方向に打ち欠きをもつ、小形といえる石錐(図-16、19)、全体の $\frac{1}{3}$ 程しか残存していない北海道式石冠(図-16、20)、表裏両面に敲打痕がみられる凹石(図-16、21)、砥石(図-16、22)は長楕円形のものが、使用により中心部がすり減り、分割した破片であると思われる。擦石(図-16、23)は裏面及び下端部に擦痕がみられる。

(寺崎 康史)

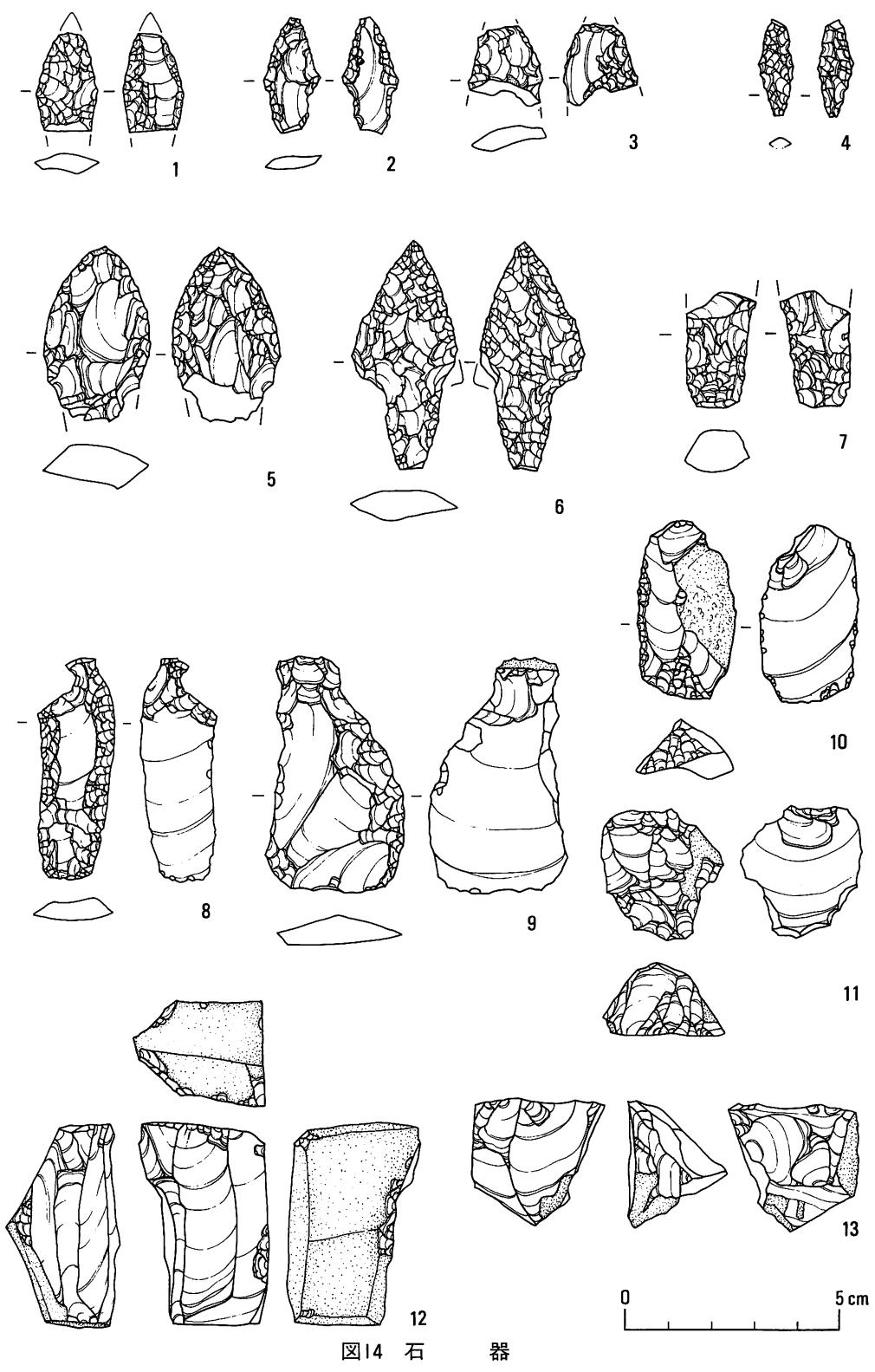


図14 石 器

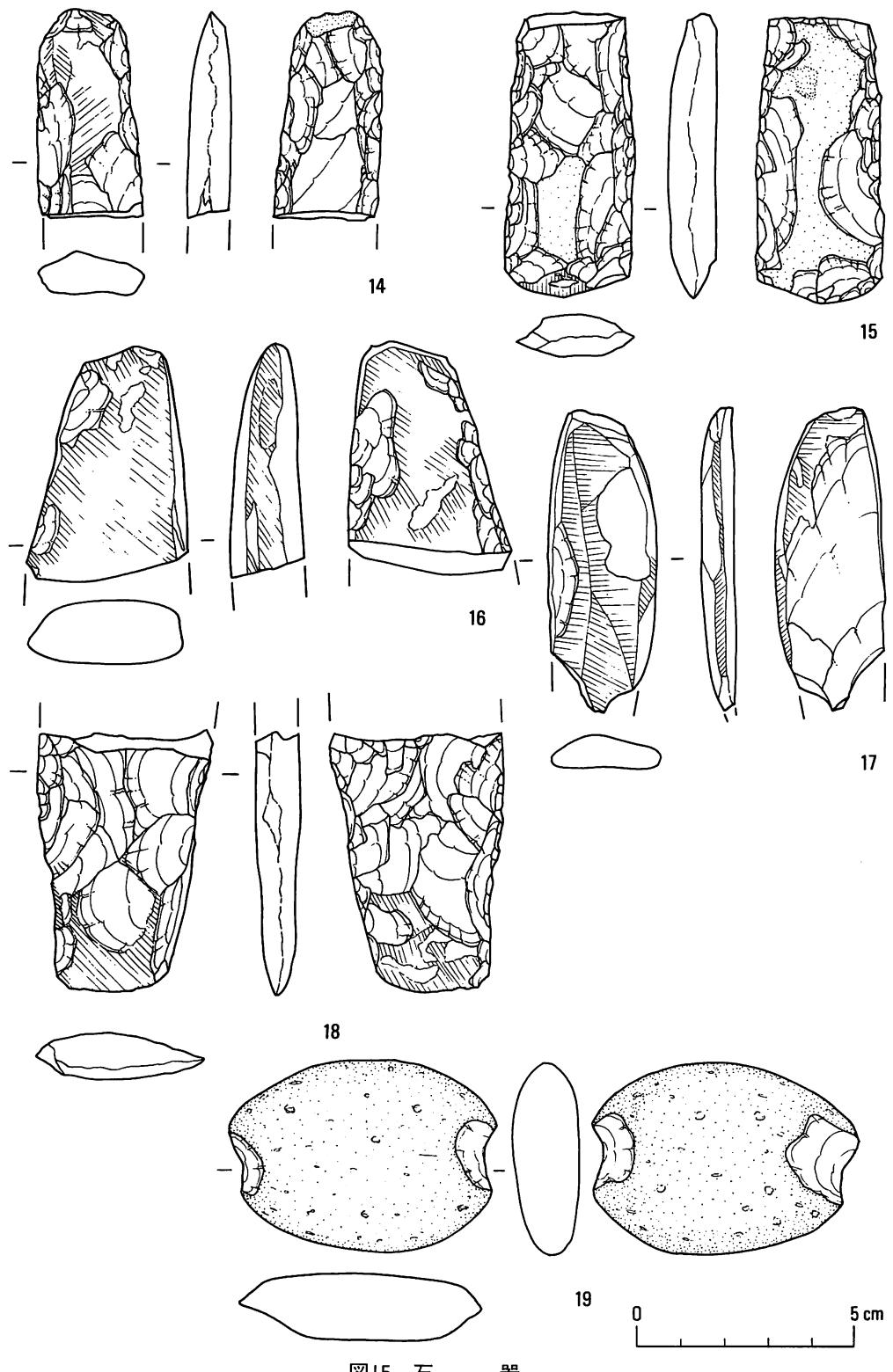


図15 石器

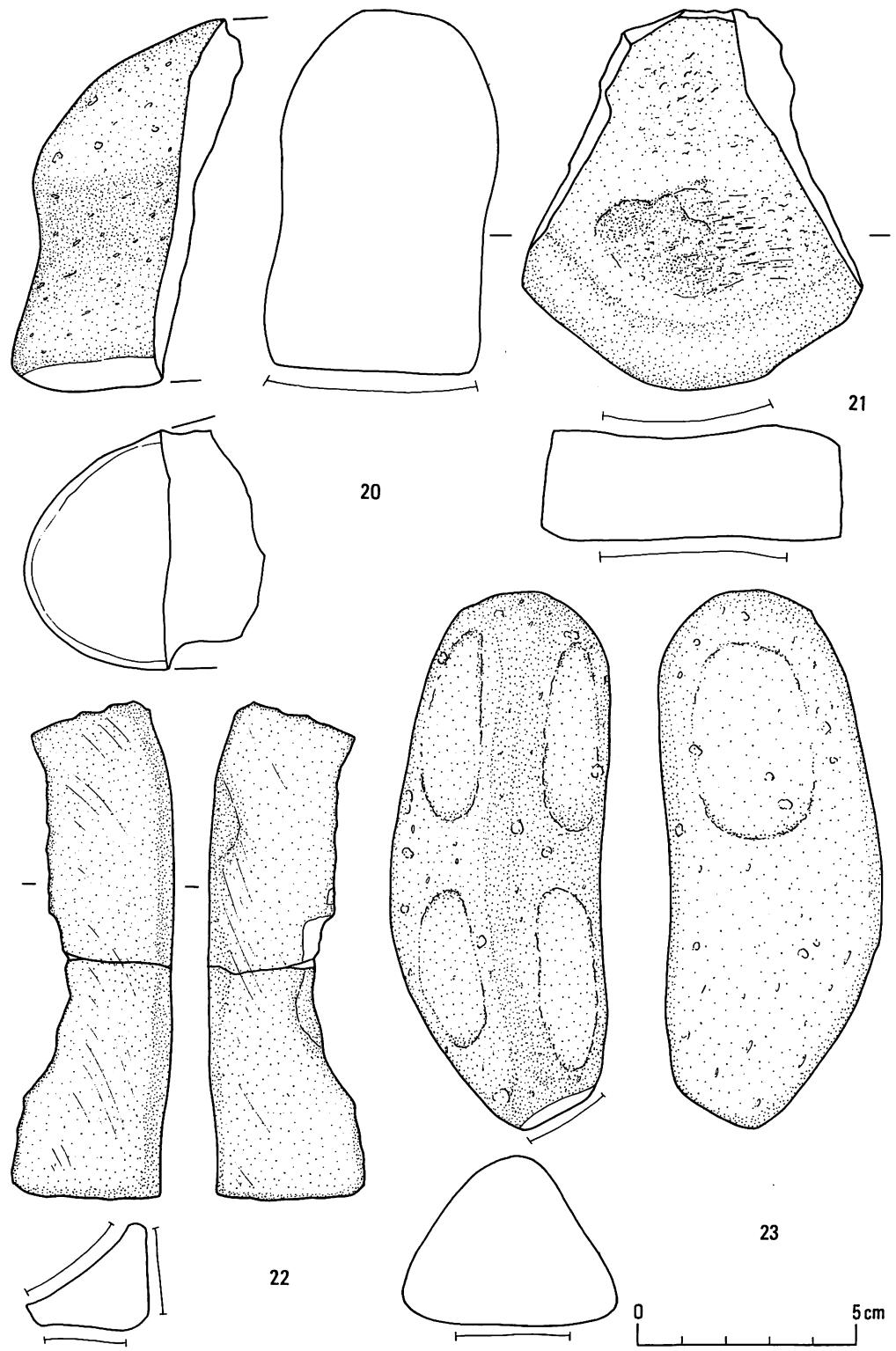


図16 石 器

表2 掲載土器一覧表

掲図番号	写真番号	グリット	層位	分類	備考	掲図番号	写真番号	グリット	層位	分類	備考
1	1	6-43-b	II	第1群	半截竹管状工具による押し引き	20	20	6-43-d	I	第2群 a	斜行繩文
2	2	7-43-b	I	"	口縁部肥厚・繩線文4条	21	21	8-43-d	風黒	第2群 b	
3	3	7-43-c	II	"	半截竹管状工具による押引き・刺突	22	22	"	"	"	
4	4	7-43-d	"	"	繩線文2条	23	24	"	"	"	
5	5	7-43-c	"	"	結束第2種羽状繩文	24	23	"	"	"	21~26は同一個体・深鉢形・沈線文主体
6	6	5-42-d	"	"	結束第1種羽状繩文	25	25	"	"	"	
7	7	5-42-c	"	"	"	26	26	"	"	"	
8	8	4-42-c	"	"	"	27	27	8-44-a	"	"	29, 30と同一個体
9	9	7-43-c	"	"	底がくの字に張り出す	28	29	13-43-a	I	"	地文に沈線
10	10	11-42-d	"	"	"	29	28	8-44-a	風黒	"	27, 29, 30と同一個体・深鉢形・口縁部外反・沈線文を主体
11	13	9-43-a	I	第2群 a	口縁部外反・内面にも繩文	30	30	"	"	"	
12	11	7-42-c	"	"	斜行繩文	31	31	22-45-a	II	"	縦位・器面調整
13	12	11-42-d	II	"	口縁部外反	32	32	21-45-b	II	"	"
14	16	"	"	"	貼付帶・円形刺突文	33	33	22-45-a	II	"	深鉢形・沈線文主体
15	17	8-43-d	"	"	貼付帶	34	34	10-42-d	"	"	
16	14	4-43-b	風黒	"	口唇部に押圧繩文	35	35	"	"	"	同一個体・鋸歯状・半弧状に沈線文
17	15	6-43-d	II	"	羽状に繩文	36	36	"	"	"	
18	18	4-43-b	"	"	斜行繩文	37	37	4-43-d	"	"	縦横に繩文
19	19	11-42-d	I	"	"	38	38	6-42-d	I	"	粘土ひも底に貼付

表3 掲載石器一覧表

掲図番号	写真番号	グリット	層位	器種名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	1	7-42-c	I	石鎌	(2.29)	1.96	0.36	1.4	黒曜石	先端部・基部欠損
2	2	18-42-d	"	"	2.62	1.37	0.31	1.0	"	
3	3	5-43-a	"	"	(2.28)	1.7	0.38	1.4	"	先端部・基部欠損
4	4	10-43-d	II	石錐	2.25	0.82	0.32	0.8	"	
5	5	9-42-c	I	石槍	(4.0)	2.5	0.83	7.8	"	基部欠損
6	6	7-44-b	II	"	5.26	2.42	0.68	6.4	"	
7	7	7-43-d	"	"	0.27	0.15	0.8	4.6	"	
8	8	6-43-d	I	石匙	5.14	1.60	0.44	5.4	珪質頁岩	
9	9	8-42-d	"	"	5.36	3.0	0.65	11.9	"	
10	10	5-42-c	"	搔器	4.15	2.3	1.1	8.0	黒曜石	
11	11	13-43-d	"	"	3.04	2.74	1.25	10.0	"	
12	12	11-42-c	"	石核	4.7	3.25	2.46	18.4	"	
13	13	7-43-d	II	"	2.89	2.98	2.26	13.4	"	
14	14	6-43-b	"	石斧	4.6	2.31	0.95	17.8	粘板岩	刃部欠損
15	15	5-42-d	II	"	6.4	3.83	1.07	31.4	頁岩	
16	16	"	I	"	5.22	3.68	1.06	43.0	緑色泥岩	刃部欠損
17	17	6-43-d	I	"	6.93	2.52	0.8	24.0	片岩	再加工品か?
18	18	18-42-d	"	"	5.88	3.93	1.12	32.4	粘板岩	刃部有
19	19	4-42-c	"	石錘	6.15	4.42	1.53	60.0	安山岩	
20	20	22-45-b	II	石冠	8.48	(4.58)	(5.13)	220.0	培結凝灰岩	
21	21	7-43-d	I	くぼみ石	8.68	7.65	2.46	192.4	砂岩	
22	22	5-42-d	II	砥石	11.12	3.49	2.43	80.2	"	
23	23	22-45-a	"	擦石	1.20	4.74	4.04	32.5	凝灰岩質安山岩	

## 引用・参考文献

- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期の編年について」 考古学雑誌 66-4
- 岩崎隆人 1963 「石狩郡当別町伊達山遺跡(第1地点)の資料」 北海道青年人類科学研究所会誌 2
- 〃 1970 「伊達山遺跡」 当別町教育委員会
- 上野秀一 1978 「石狩海岸砂丘の遺跡群について」 北海道考古学 14 輯
- 桑原謙 1966 「北筒式土器」 考古学雑誌 51-4
- 〃 1968 「余市式土器」 〃 54-1
- 野村崇・宇田川洋 1967 『長沼町幌内堂林遺跡調査報告』 長沼町教育委員会
- 森田知忠 1981 「北海道」 『縄文土器大成3 後期』 講談社
- 峰山巖 1958 「入江貝塚」 北方文化研究報告 13 号

### III ま と め

#### 1 Tピット

今回の調査結果に基づき、以下に若干の考察を記す。

##### 〈分類について〉

今村氏は12型に分類しているが、道内のTピットの大半はE型とされたものであり、本遺跡も例外ではない。「霧ヶ丘」以降、Tピットに関する分類が数多く試みられているが、基本的には対象獸の四肢のみを落とすことにより骨折を目的とする細いタイプと、身体全体を落とすタイプの二つであろう。尚、苫小牧市埋蔵文化財調査センターでは、苫東内321基のTピットの計測値を基に詳細な分析を実施中である。それに依れば西野幌11遺跡のTピットは、苫東内で半数近くを占める底面長軸2m以上、長幅比9以上、杭穴のないグループに属す。

##### 〈埋まり方について〉

TP-6の覆土を見ると、大きく三つの段階に分かれる。即ち1~6層、7~10層、11層以下の部分である。1~6層は本ピット放棄後の流れ込み、壁面上部の崩落による堆積11層以下は、本ピット構築時から比較的短時間での堆積と考えられる。ここで疑問となるのは中間部分の堆積である。従来、こうした堆積は壁面の崩落と黒色土の流入と考えられていたが、先にも記したように、本ピットではVI層を壁面とする部分の崩落はさほど大きくなかった。従って、崩落以外の要因、例えばピットの壙口部を擬装・修復した際の土の可能性も考慮する必要があろう。

##### 〈構造について〉

佐藤孝則氏によれば、エゾシカの成獣の雄の蹄長は $9.1 \pm 0.8$ cm、胴幅 $33.6 \pm 3.5$ cm、体高 $104 \pm 8.5$ cmとなっている。本ピットの場合、開口部の幅は不詳であるが、エゾシカの胴幅を越えるものとは考えにくい。四肢を落とすことを目的としているならば、深さは70~80cmあれば充分である。確認面から110cmという深さは、あらかじめTピットがある程度埋まるごとを想定し、なおかつ使用可能な状態を維持するためのものであろう。さて、Tピットの埋まる原因であるが、それは自然崩落ではなく、エゾシカが落ちる際に生じる崩れではなかろうか。言い換えれば、繰り返しエゾシカを捕獲する目的で深さを決定していると考えられる。

##### 〈立地について〉

西野幌11遺跡で確認された6基のTピットは、標高17m~19mの間に所在する。TP-1~TP-3は小沢の西側に沿って、TP-4~TP-6は小舌状部を取り巻くように配置されている。長軸方位はまちまちであるが、それぞれの地点での傾斜の方向に沿って構築されている。

##### 〈構築年代について〉

本ピットの構築年代を明確にし得る資料はない。わずかに、覆土1層中より余市式系の土器

片が流れ込みの状態で出土しており、それより古い時期の構築と考えられるのみである。なお、大麻1遺跡の壙底から出土した炭化物の<sup>14</sup>C年代は3,760±120B.P.となっている。また、東北地方北部では中振浮石層上位より掘り込まれているなどの点から縄文時代中期末～後期初頭の年代が与えられている。

#### 〈掘削具について〉

壁面に残された掘削痕は、概ね幅5cmで1cm程度のふくらみを持つ。殆どが縦方向に見られるが、稀に斜めに突き立った痕もある。底面に残された掘削痕は、幅3cmで先端の両側が丸みを帯びている。断面は扁平な二等辺三角形に近い。どうやらヘラ状の工具で突き崩しながら掘り進めたものようである。土を洗った限りではフレイク・チップの類いは見い出すことはできなかったので、石器が使用された可能性は低い。

(田才 雅彦)

## 2 遺 物

土器・石器の各層位別の出土量は、I層207点、II層226点、風倒木等の攪乱から115点(土器のみ)である。遺物の分布状況をみると、A地区の13ライン以西は耕作により包含層の大半が攪乱されており、遺物はほとんど分布しないが、A地区東側の6～8ライン間の沢地形の部分においては、包含層の保存状態も良く、比較的まとまって分布している(図-17)。

土器については、出土量が少なく、しかもその特徴をとらえる口縁部が余りにも断片的であるため、今後、本遺跡周辺の資料の増加とともに若干の検討を要する部分があるが、出土土器から本遺跡は縄文時代中期中葉から後期にかけて形成されたものと考えられる。

石器については、出土した資料のみからでは、その所産の時期を限定することはできないが、遺跡内の出土土器からみても、その編年的位置に準じる時期が与えられよう。ただし、一点の石錘に関しては、大きさ、形態から早期の所産とも考えられる。(田口 尚、寺崎 康史)

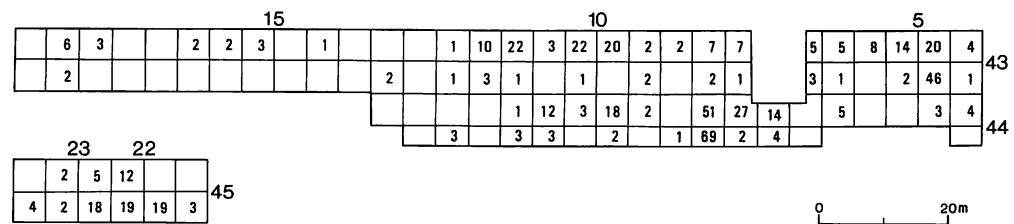


図17 出土遺物分布図

本遺跡の調査は、昭和 58・59 年度にも行なわれており、それについては別途、報告の予定である。本遺跡の主体をなす時期は、沈線文、磨消文が発達する縄文時代後期初頭から中葉の入江式土器、手稻式土器の時期であり、当時の人々は舌状に張り出した台地の先端あるいは、小沢の周辺を生活空間として占地し、本年度調査区もその一部であったものと考えられる。また、台地の縁辺および小沢の周辺には T ピットが存在し、縄文時代中期中葉から後期初頭のいずれかの時期には、狩猟を主とした空間であったと考えられる。

#### 引用・参考文献

- 石本省三・長谷部一弘・藤田登 1975 「函館空港第 4 地点遺跡」『北海道考古学第 11 輯』  
今村精一・千代肇 1977 「V-3 T ピット」『函館空港第 4 地点・中野遺跡』  
内山真澄 1977 「V-2 札幌 S 267、268 遺跡の土壤群」『札幌市文化財調査報告書 X IV』  
遠藤香澄 1982 「IV-3 T ピット」『美沢川流域の遺跡群 発掘調査の概要』  
大沼忠春 1983 「礼文島船泊遺跡の墳墓と人骨」『北海道考古学第 19 輯』  
霧ヶ丘遺跡調査団 1973 「霧ヶ丘」  
河野広道・藤本英夫 1961 「御殿山墳墓群について」『考古学雑誌 46-4』  
小松真名 1984 「III・1・1) 陥し穴土坑」『多摩ニュータウン遺跡 昭和 58 年度(第 1 分冊)』  
佐藤孝則・丹後輝人・芳賀良一「エゾシカの分娩とその徴候、および新生児の行動について」『帯大研報 12』  
佐藤孝則 1983 「北海道における溝状ピットの自然科学的検討」『十勝考古第 6 号』  
佐藤孝則 1985 「大雪山系南部におけるエゾシカの食性」『帯広百年記念館紀要第 3 号』  
坂川 進 1982 「V-1-3 溝状ピット、V-3-1-(3) 溝状ピット、VII-2-(1) 陥し穴状遺構、VII-4-1 陥し穴状遺構、VII-4-2 溝状ピット」『長七谷地遺跡発堀調査報告書』  
武内収太 1967 「函館空港整備事業の内遺跡発堀調査実績報告書」  
名久井文明 1977 「東北地方早期縄文土器と中野遺跡」『函館空港第 4 地点・中野遺跡』  
函館市教育委員会 1969 「函館空港整備事業の内遺跡発堀調査実績報告書」  
福田友之 1982 「4-2-2 溝状ピット、5-1-3 溝状ピット」『発茶沢』  
宮坂英式・宮坂虎次 1966 「城え平豎穴群遺構遺跡」『蓼科』尖石考古館  
森田知忠・遠藤香澄 1984 「T ピット論」『北海道の研究 考古篇 I』  
渡辺 誠 1974 「食料資源」『考古学ジャーナル 100』

## IV 西野幌 11 遺跡 (TP-6) 出土の植物遺体

矢野牧夫

### 1 観察の結果

13 本のガラス製管瓶（直径 1 cm、深さ 4.2 cm）に封入された植物遺体 135 点を観察した。それらの大部分は、球形で種子状の遺体である。

それらは、おおまかに

- 1) 直径数 mm 程度のもの
- 2) 直径 1 mm 程度のもの
- 3) 直径 1 mm 以下のもの

の 3 種に分けることができた。

これらの球形で種子状の遺体は、すべて焼けこげており、表面の模様などは観察が不可能である。そのためほとんどが木本種子、草本種子の区別がつかない状態である。

わずかに特徴を示すものとして

- TP-6 覆土 (1-A) Carex カヤツリグサ科 頸果、  
TP-6 覆土 (1-B) Cornus ミズキ科ミズキ属 果実、  
Chenopodium アカザ科 種子、

の 3 種を確認することができた。他はいずれも不明種としてとり扱った。

### 2 考察

上記の出土資料を概観すると、縄文時代の各期における大部分の遺跡で出土している、

Juglans	オニグルミ
Castanea	ク リ
Quercus	ミズナラ
Vitis	ヤマブドウ
Actinidia	サルナシ・マタタビ

などの一般的な堅果類、種子類がまったくみられないことは、きわめて特異な事例と思われる。

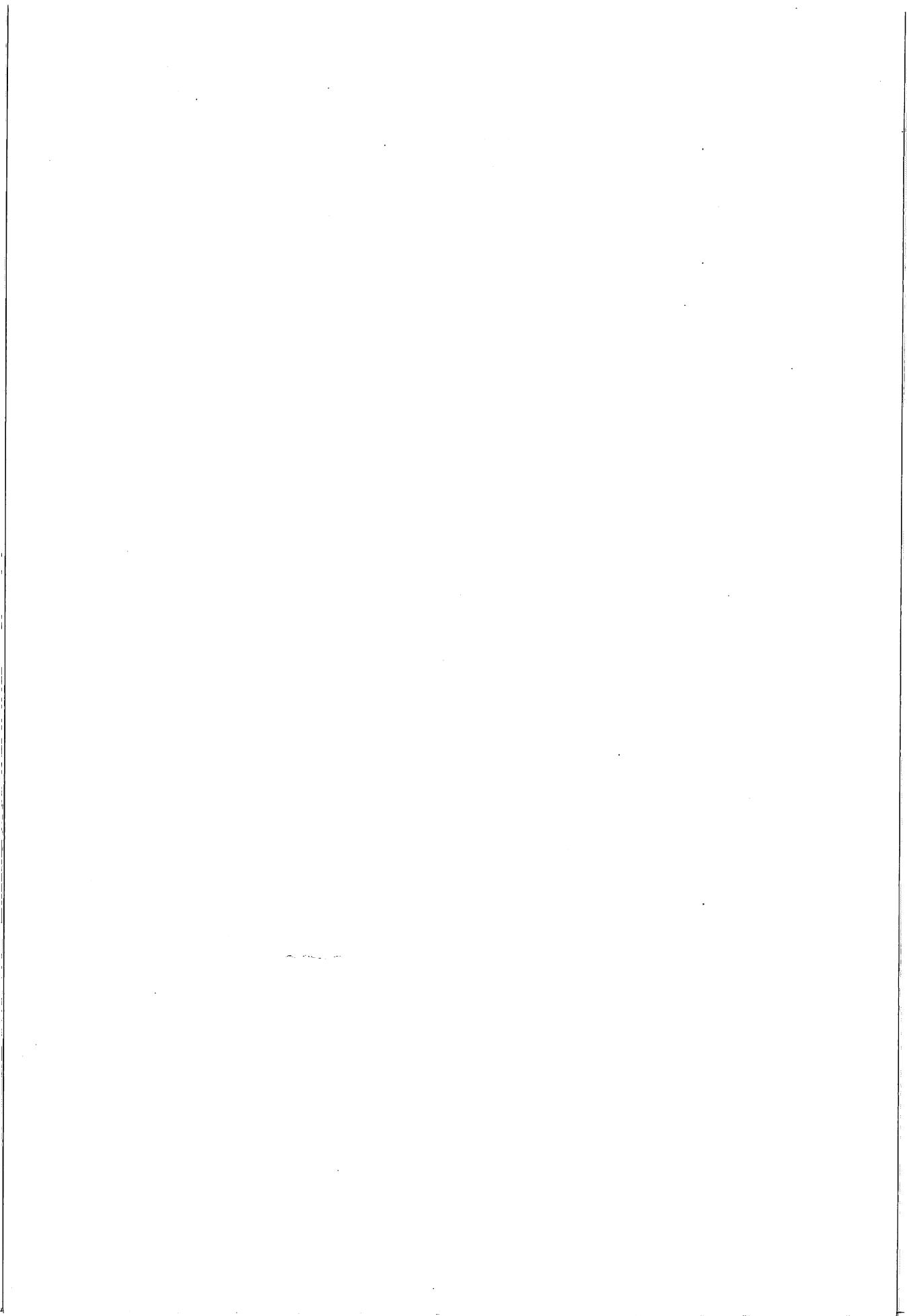
これらの堅果類、種子類などは、本来、それらが山野に実る秋季以降に食料として利用されるものであるが、それらがまったく出土していないことは、この地点での遺構が、当時、生活の場として年間を通して使用されたものではなく、季節的にかなりのかたよりがあった可能性を示しているものと考えられる。

### 3 問題点

出土した植物遺体から考えられる状況を記したが、他部門の出土資料からも厳密に検討する必要がある。

なお、上記の考察は、与えられた資料からのみの見解であり、現地での植物遺体の産出状態

などを、層位学的、古植物学的立場から観察する機会があれば、より詳細な見解や、やや異った情報を提供し得る可能性があったことも考えられる。



# 写 真 図 版



西野幌II遺跡遠景

図版 I



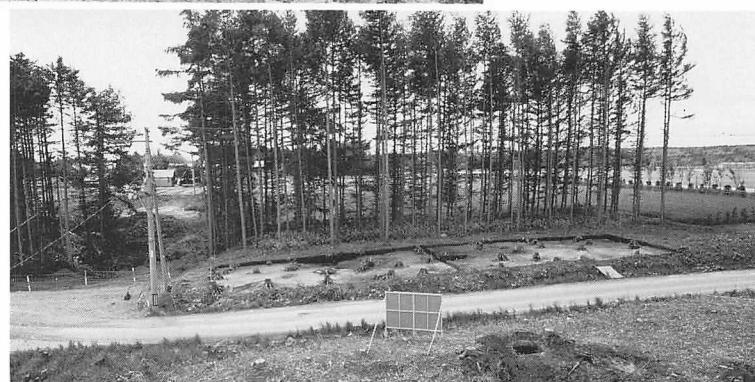
A地区発掘前風景



A地区完掘風景



A・B地区間発掘前風景



B地区完掘風景



A地区から望むB地区

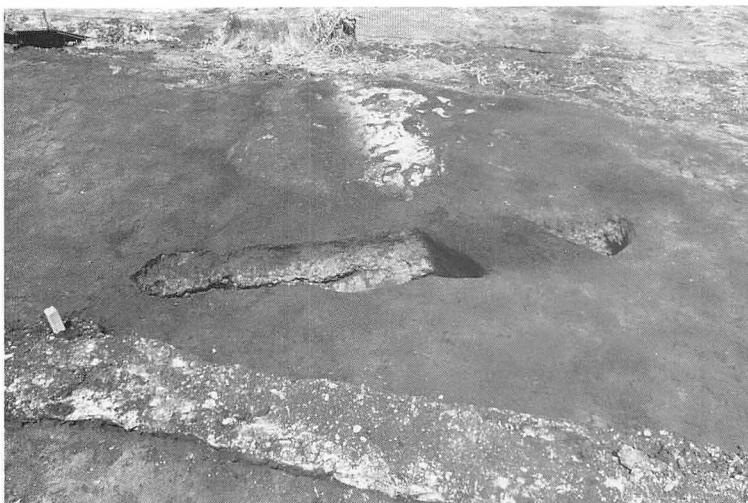


A地区調査風景



B地区調査風景

図版III



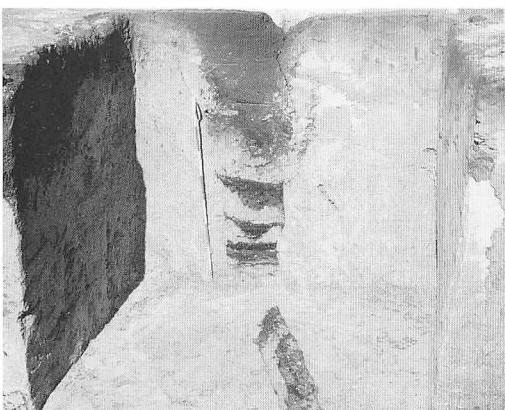
TP-6 確認面



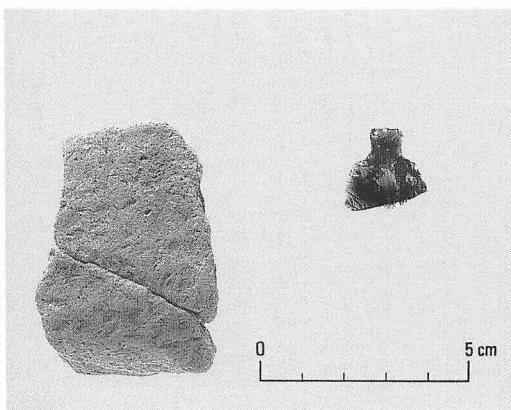
TP-6 掘下げ風景



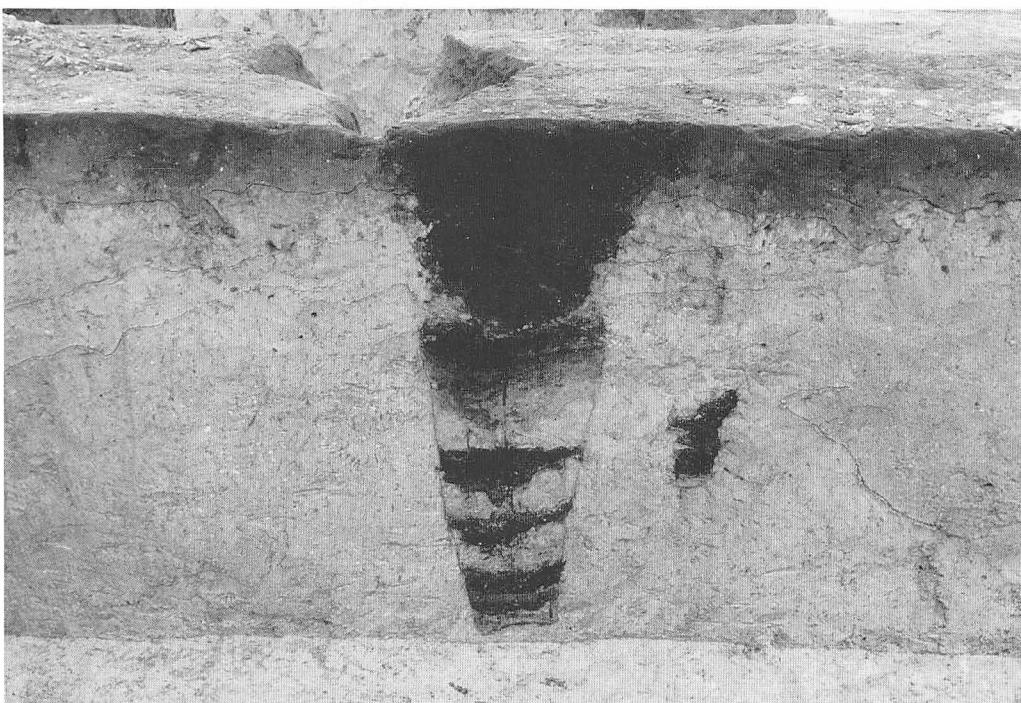
TP-6 実測風景



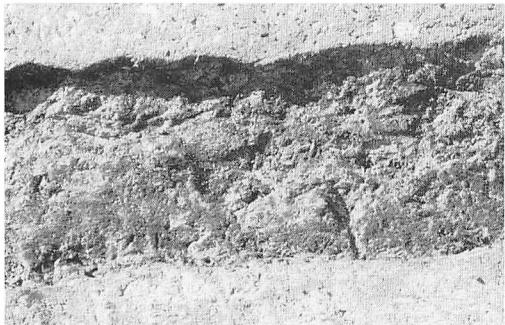
TP-6 断面①



TP-6 覆土遺物



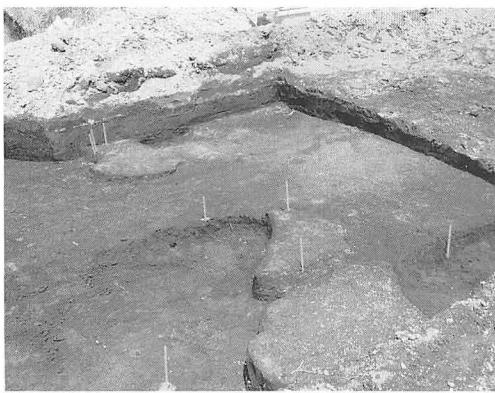
TP-6 断面②



TP-6 底面削痕



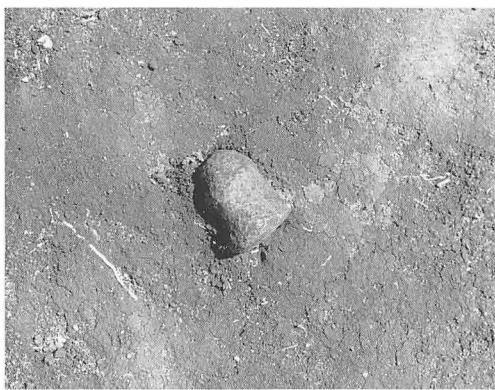
TP-6 壁面削痕



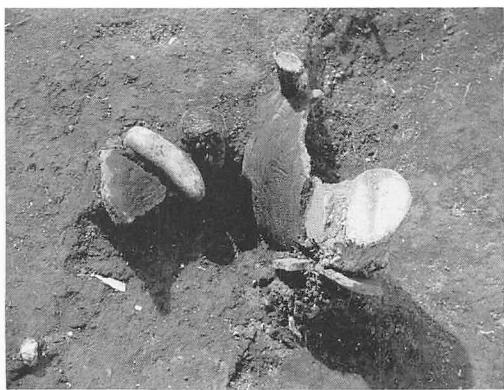
遺物出土状況



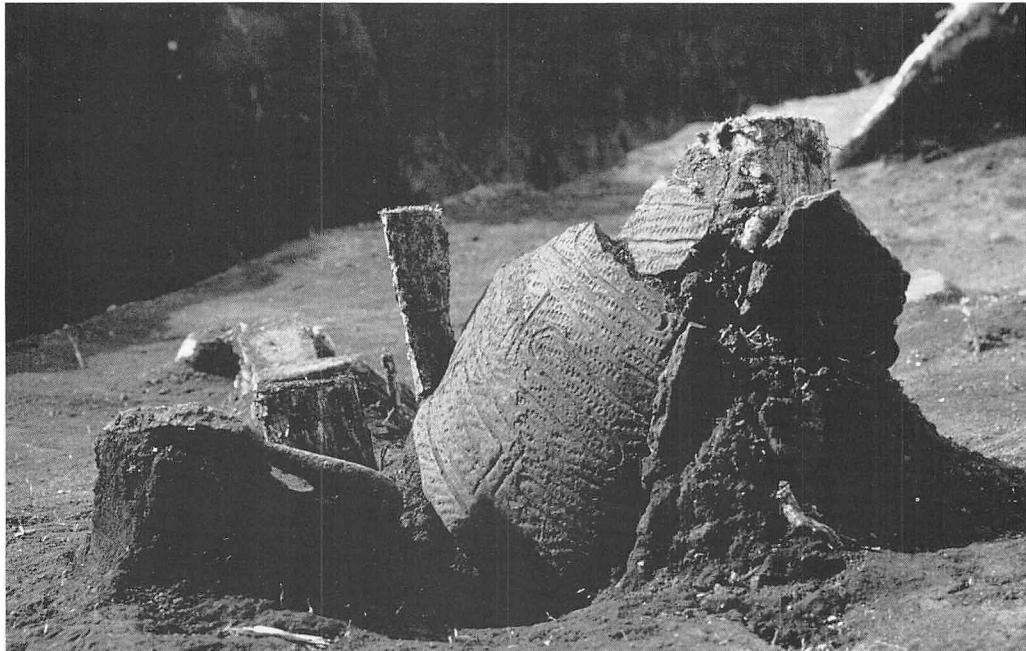
遺物出土状況



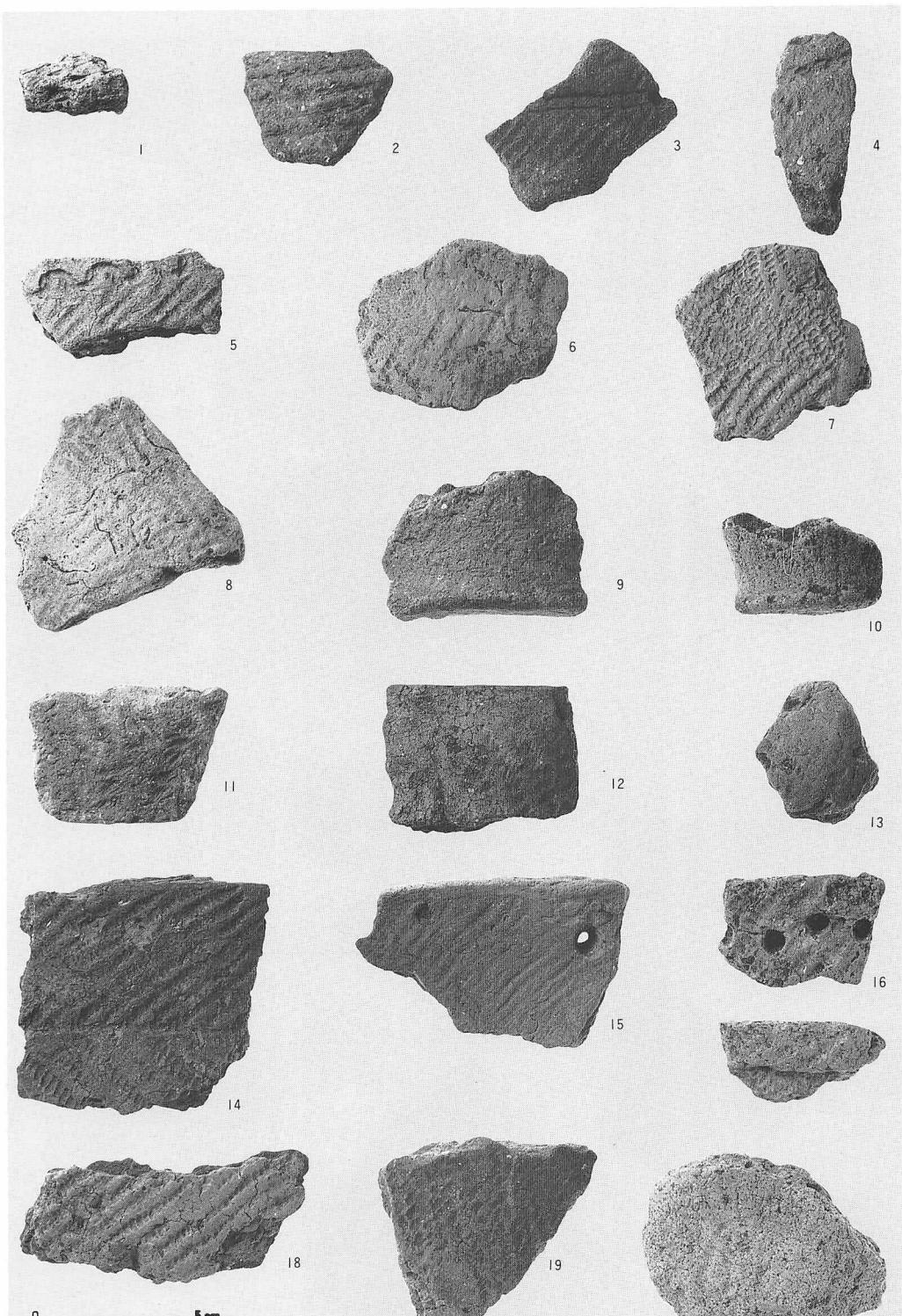
北海道式石冠出土状況



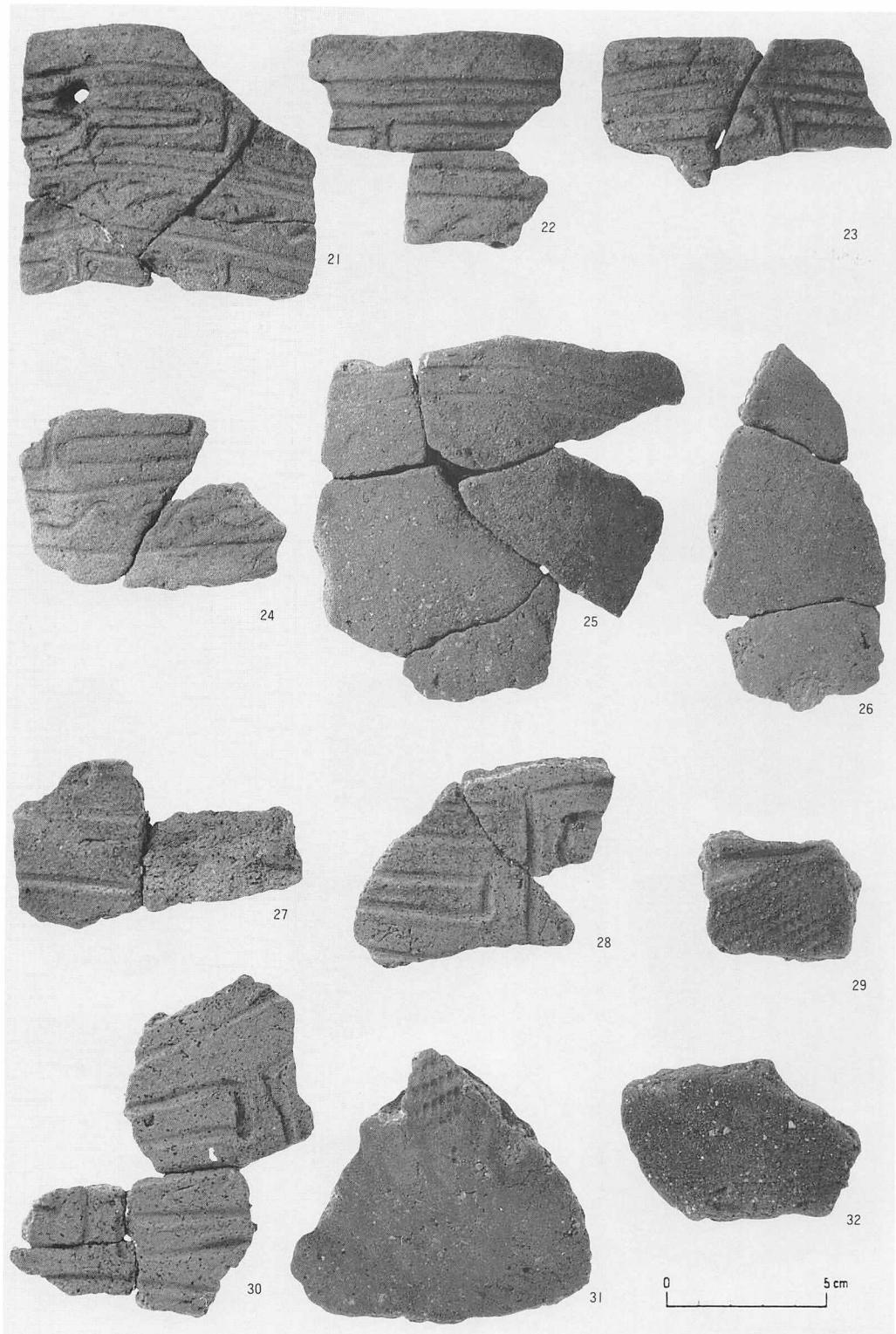
土器出土状況（真上から）



土器出土状況（横から）



土器 I

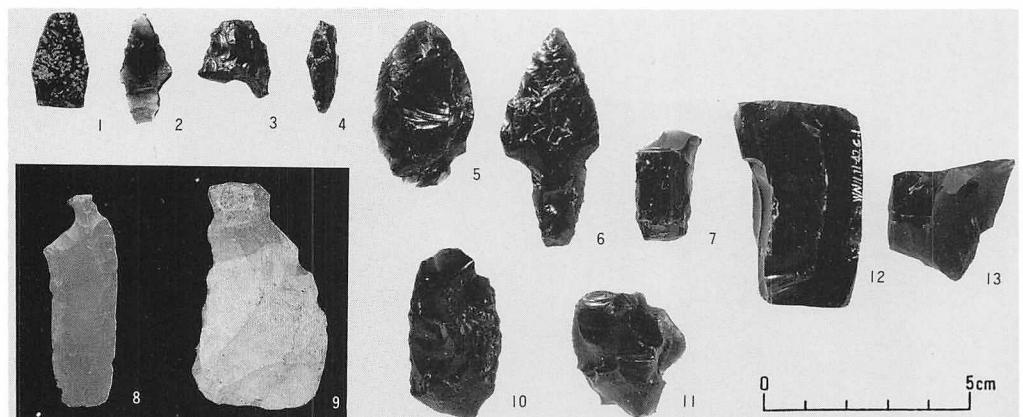


土器 2

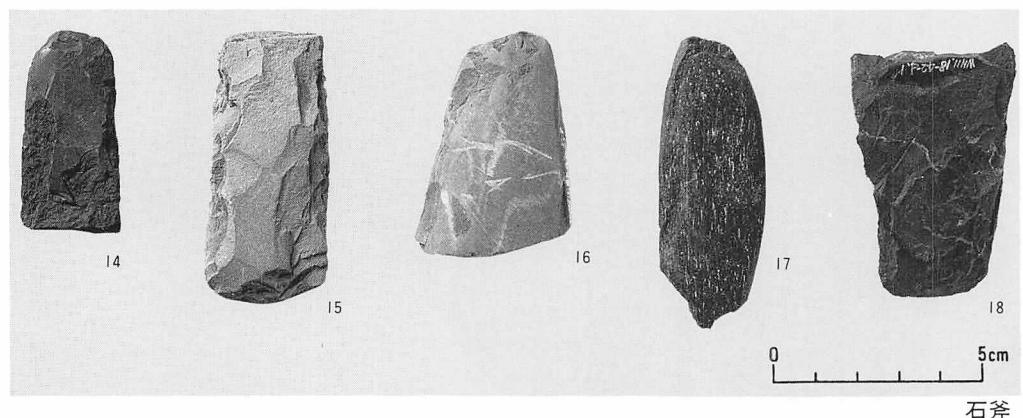


土器 3

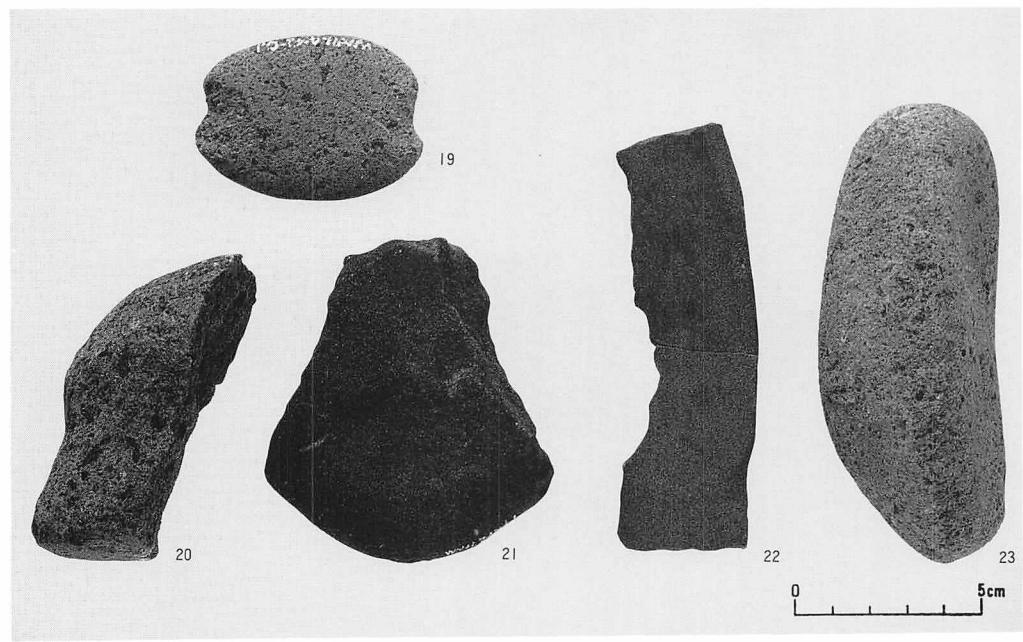
図版IX



剥片石器



石斧



礫石器

財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第25集

## 西野幌11遺跡

－道々野幌総合運動公園線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書－

昭和61年3月31日 発行

編 集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
発 行

064 札幌市中央区南26条西11丁目  
☎ (011)561-3131

印 刷 協業組合 高速印刷センター  
札幌市西区曙2条5丁目2-48  
☎代表(011)683-2231

